漢川善書の創作に関する研究

林　　宇　萍

一　はじめに

湖北省漢川市とその周辺の仙桃市には、今もなお伝統的な「善書」の宣講が行われており、一般に「漢川善書」として知られている。この宣講はもともと清朝時代の聖諭の宣講に由来し、順治九年（一六五二）の「聖諭六訓」、康熙九年（一六七〇）の「聖諭十六条」という民衆に道徳観念と法律観念を植え付けるための聖諭を全国に頒布し、毎月二回、郷約によって読誦するよう通達を下して、清朝一代を通じて徹底させた。宣講の実施については、陳兆南が『宣講及其唱本研究』（一九九二）第三章「清代宣講」第二節「清代郷約講諭」において、地方志の記載によって確認している。清末に至ると民間で「案証」という具体的事例を挙げた説得方法が創案された。その最初でかつ代表的なテキストである王錫鑫『宣講集要』十五巻（咸豊二年〔一八五二〕序）が「聖諭十六条」の各条について「案証」と称する果報説話によって挙証し、教条に説得力を与えた。それ以後、『宣講拾遺』六巻（同治十一年〔一八七二〕）など陸続と類似の案証集が編纂された。(1)

『宣講集要』の案証の文体は、説得力を与えるため基本的に伝記の形式を取るが、ストーリーを講じる部分と人物が言葉を歌詞で表明する部分とから成っており、歌詞は多く日常会話調の十言句で唱われる。案証には四川や湖北の方言である「西南官話」が使用され、当地の無学な民衆が聴いてもわかるように工夫している。また案証の結末は、ほぼ「従此案看来、百行孝為先、万悪淫為首、人可不勉哉。」（この案証から考えると、百の行為の中で孝行が最も優先され、万の悪行の中で淫乱が最も嫌われるのであり、人は勉めなければならないのです）〔巻二「勧孝戒淫」〕のような教訓の言葉で締めくくられた。

漢川善書は基本的にこうした『宣講集要』などの案証集の文体を踏襲しており、上演する作品もこうした案証集から抄録したものが少なくない。ただ現代の漢川市の善書には新たな工夫が見られ、演劇や説書に取材した作品が出現し、歌唱の場面が多く設定され、聴衆の娯楽性を考慮したものに変容してくる。それはもっぱら教化を目的とした時代から営利を目的とする時代への変遷と大いに関係があり、善書の上演場所も公廟など神聖な場所から書場（演芸場）へと移っていることからも明らかである。

本論では、善書の代表的な作品を通じて、現代の漢川地域に伝承する善書の中で小説・戯曲を

改編した作品について、その取材源を明らかにするとともに、娯楽性の中にどのように教訓的趣向を反映させていったかを考察してみたい。

二　案証の物語化

現代の「漢川善書」は伝統善書と創作善書に大きく分類することができる。案証はもともと善行の事例であり、素朴な内容であったが、次第に物語としての成熟が求められ、伝統善書にも創作善書にもストーリーに工夫を加えた作品が登場していった。

1．伝統善書は『宣講集要』などの先行する宣講テキストに取材したもので、以下のような作品があり、漢川善書がこうした清代末期の宣講のスタイルを継承するものであることを明らかにしている。これらの作品の中にもすでに『四下河南』（『滴血成珠』）、『珍珠塔』などのような長篇で、物語として聴衆を楽しませる作品が出現している。

『三娘教子』（『宣講集要』巻四）
『狗報恩』（同書巻六）
『安安送米』（同書巻十）
『天理良心』（同書巻十一）
『善悪異報』（同書巻十二『団円報』）
『金玉満堂』（同書巻十三）
『双官誥』（『宣講拾遺』巻四『双受誥封』）
『恩義亭』（『福海無辺』巻一）
『破毡帽』（同書巻三）
『梅花金釵』（同書巻二）
『五子哭墳』（『宣講摘要』巻一）
『吉祥花』（『宣講福報』巻一）
『還人頭願』（同書巻二）
『四下河南』（同書巻三）
『白公鶏』（『触目警心』巻一）
『双槐樹』（同書巻三）
『孝遇奇縁』（同書巻四）
『珍珠塔』（同書巻四）
『成人美』（同書巻四）
『双屈縁』（同書巻五）
『嫁嫂失妻』（『宣講珠璣』巻四）
『滴血成珠』（同書巻四）

2．創作善書には現代世相に取材した作品と、小説戯曲に取材した作品とに分けられ、次のような作品がある。

1）現代世相に取材した作品には以下のような作品があり、筆者がすでに考察したように、『打碗記』は同名の淮劇作品を善書体に改編した作品であり、その語りには小説的な語りの工夫が行われていた。

『打碗記』
『双教子』
『戒牌』
『換子』
『四個婆婆説媳婦』

2）小説・戯曲に取材した作品はいうまでもなく、ストーリーの波瀾を楽しむことを目的としており、以下のような作品がある。

『父子双合印』（仙桃市鍾立炎）
『蘇州訪賢』（同）
『鉄樹開花』（仙桃市尹業謨）
『断臂姻縁』（仙桃市杜子甫）
『望江楼』（同）
『法堂換子』（同）
『珍珠衫』（同）
『珊瑚宝珠』（同）
『三子争父』（同）
『売花姑娘』（同）
『双英配』（一九八二年抄録、漢川市陳貽謀）
『双婚配』（一九八二年抄録）（同）
『三月英』（漢川市何文甫）
『義侠伝』（同）
『王華買父』（同）
『粉粧楼』（漢川市袁大昌）
『楊家将』（同）
『董小宛伝奇』（同）
『天宝図』（同）
『地宝図』（同）
『三縁記』（同）
『梁祝姻縁』（同）
『秦雪梅』（同）
『車棚産子』（同）
『唐李旦』（同）
『双婚配』（同）
『再生縁』（同）
『万花村』（同）
『薛平貴回窯』（同）
『陳三両爬堂』（同）
『状元尋母』（同）
『秦香蓮』（漢川市徐忠徳）
『鍘包勉』（同）
『双月図』（同）
『尋児記』（同）
『劉子英打虎』（同）
『李三娘』（同）
『鳳頭玉簪』（同）
『青風亭』（同）
『放白亀』（同）
『売子奉親』（同）

本論ではこの物語として楽しめるよう工夫した作品について考察してみたい。

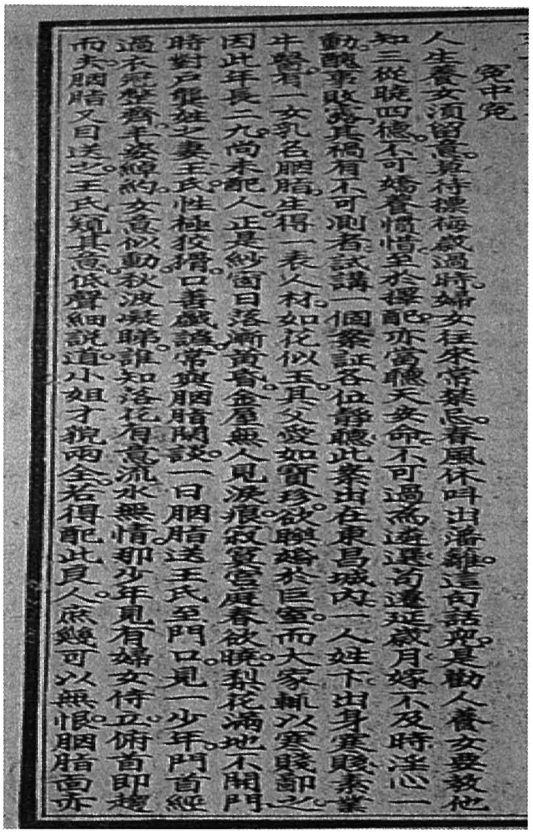
三　取材源と改編

1．『冤中冤』（袁大昌）

この作品は蒲松齢『聊斎志異』巻十「臙脂」に取材した作品であり、『福海無辺』巻四「冤中冤」として収録されている。

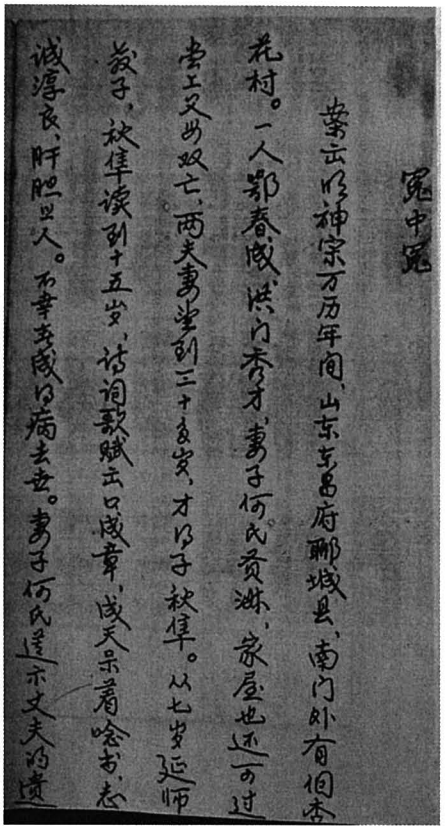
『聊斎志異』巻十「臙脂」は以下のようなストーリーである。

東昌の卞氏は獣医であり臙脂という娘があったが縁談が決まっていなかった。向かいの龔家の妻王氏は軽薄で、臙脂が通り過ぎた少年に秋波を送るのを見て、少年が秀才鄂秋隼であることを告げ仲介をしようと言う。娘は本気にしたが王氏から返事が無いので病気になる。王氏は少年との密会を提案するが、娘は媒酌が無ければだめだと拒絶する。王氏の愛人宿介は鄂生と偽って娘を訪ね、娘の靴を奪い去るが遺失し、毛大という無頼が拾って娘の家を訪ねて父親を殺す。娘は鄂生を県に訴え、鄂生は拷問に耐えきれず冤罪を被り、娘から罵られても訥弁で反論ができず死罪となる。済南府太守の呉南岱は鄂生を見て冤罪だと確信し、審問して王氏の愛人宿介を死罪に決するが、宿介は学使施愚山に控訴し、施は王氏を訪問した者を城隍廟に集め、神が背に印をつけないように壁に接触した毛大を犯人と断定する。鄂生は県令の仲介で娘を娶る。


冤中冤

人生養女須留意。莫待摧梅歲過時。婦女任來常禁忌。春風休叫出藩籬。這句話如是勸人養女要教他知三從聽四德。不可嬌養慣惜至於淫亂。亦當聽天安命。不可過爲逆遷。苟遷延歲月。嫁不及時。淫心一動。醜事敗露。其禍有不可測者。試講一個案証。各位靜聽。此案出在東昌城內。一人姓卞。出身賤。素業牛醫。有一女乳名胭脂。生得一表人材。如花似玉。其父愛如寶珍。欲聯婚於巨室。而大家輒以賤部之。因此年長二九。尚未配人。正是紗窗日落漸黃昏。金屋無人見淚痕。叙寶宮庭春欲曉。梨花滿地不開門。時對戶張姓之妻王氏。性極狡猾。口善戲謔。常與胭脂閒談。一日胭脂送王氏至門口。見一少年。門首經過。衣冠整齊。毛姿綽約。女意似動。秋波凝眸。誰知落花有意。流水無情。那少年見有婦女侍立。俯首即趨而去。胭脂又目送之。王氏知其意。低聲細說道。小姐才貌兩全。若得配此良人。庶幾可以無恨。胭脂面亦

『福海無辺』（民国二年石印本）巻四「冤中冤」


冤中冤

紫云曰。神宗万历年间。山东东昌府聊城县。南门外有伯杏花村。一人鄂春成。洪门秀才。妻子何氏贡淋。家屋也还可过。岳丈又幼双亡。两夫妻坐到三十多岁。才得子秋隼。从七岁延师教子。秋隼读到十五岁。诗词歌赋出口成章。成天呆着啥书。志诚淳良。肝照四人。不幸春成得病去世。妻子何氏送亦丈夫的遗

袁大昌『冤中冤』

『福海無辺』（民国二年石印本）巻四「冤中冤」のストーリーは『聊斎志異』巻十「臙脂」とほぼ同じであり、臙脂が県で鄂生を告訴する場面、王氏が済寧府太守呉南岱の審問に屈して愛人の存在を自供する場面、施公の審問に毛大が自供する場面、姦淫の罪を犯した宿介が衆人の前で懺悔する場面に「宣」を設けている。『聊斎志異』との相違は、王氏は夫に離縁され自害して地獄に堕ち、宿介は王氏の亡霊に命を奪われるという因果応報の結末を付加しているところである。だが袁大昌『冤中冤』に至ってストーリーは改変され、臙脂と鄂秋隼、宿介と王氏の二組の男女

は何らやましい関係ではなくなる。特に王氏は寡婦であり再婚は許されるとしているところに現代善書の特色を表している。王氏と臙脂、宿介と秋隼の友情、何氏と秋隼の親子の情の表現などに「宣」の場面を設けている。

○明神宗の万暦年間、山東東昌府聊城県の秀才鄂春成は妻何氏との間に一子秋隼があったが病気で死亡し、その後何氏も病気になり、秋隼は医者を捜して獣医の卞姓を訪れたところ、臙脂が出てもう一軒の卞姓の医者の家を教え、男女は互いに恋慕しあった。隣家の寡婦王春蘭はそれを見て臙脂に表兄宿介を通じて秋隼との結婚を仲介すると言い、できれば自分も今度は自由意思で宿介と再婚したいと語り、臙脂も真情を語り仲介を依頼する（①王春蘭対臙脂・回詞）。

○宿介は伯母の誕生祝いに出かける秋隼を捜しあてて臙脂との婚姻を勧め、秋隼も帰宅してから縁談を進めると約束する（②宿介対鄂秋隼）。

○臙脂が王氏の返事を待っていると、男が現れ秋隼と言うので求めに応じて靴を贈る。実は宿介が秋隼のためにしたことであった。王氏は宿介が来たと思って門を開けると毛大であったので鳳頭の簪を渡して追い出し、その声に驚いた宿介は靴を落とす。宿介は秋隼に替わって臙脂に会ったことを語り、王氏は宿介と臙脂の軽率さを非難する（③宿介対表妹・回詞）。

○毛大は話を盗聴して卞家に行くが、卞三を殺害して逃走する。臙脂は父の死を悲しむ（④臙脂哭尸）。

○実地検分した県令張宏は姦通事件と考えて臙脂を捕らえる。臙脂は鄂秋隼を訴える（⑤臙脂上堂）。

○県令は臙脂を収監し、秋隼を喚問する。秋隼は無実を訴える（⑥秋隼上堂）。

○何氏は監獄の秋隼を見舞う。秋隼は母に諦めるよう諭し、母は必ず冤罪を訴えると告げる（⑦母子監牢会・回詞）。

○宿介は連名で東昌府に上告し、太守呉南岱は被告を連行して審問する。臙脂は秋隼が冤罪だと訴え、秋隼は自分が伯母の家に行っていて臙脂を訪れていないと訴える（⑧卞臙脂上堂・接出秋隼宣詞）。

○呉太守は雑貨商に変装して偵察し、王氏の家の前を往来する毛大から王氏と宿介の関係を聞き、臙脂の靴を落として反応を見て二人を召喚する。宿介は秋隼の無罪を訴え、自分が殺人の罪を被る。（⑨宿介上堂）。

○王氏は学台の施如山の行く手を阻んで宿介の冤罪を訴え、施公は臙脂の部屋を知っていた宿介が卞三を殺すはずがないと考え、呉太守に再審を命じる。呉太守が王氏を審問すると、王氏は宿介と夫婦になるつもりだと告げ、現場に落ちていた簪も自分が毛大を追い払うために渡したものだと言う（⑩王春蘭上堂）。

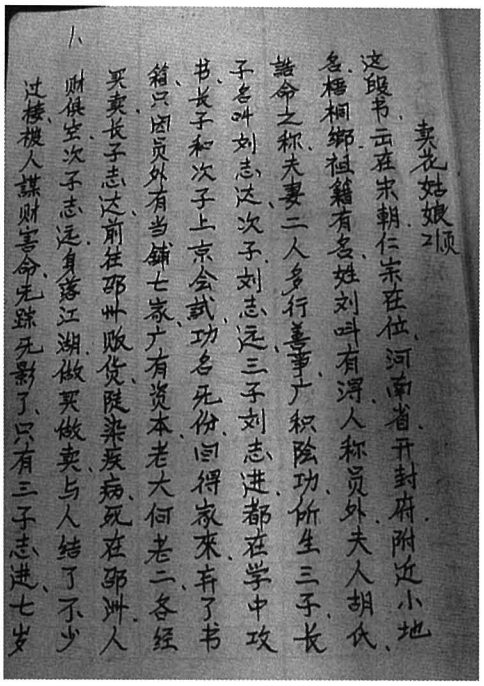
○呉太守は毛大が犯人だと悟り、毛大を審問すると、毛大は犯行を自供する（⑪毛大上堂）。

○呉太守は施公に対して軽率な審判をわび、二組の男女は結婚する。

2．『売花姑娘』（杜子甫）

この物語は明の説唱詞話『曹国舅公案伝』に起源する北宋・包拯（九九九―一〇六二）の裁判話「包公案」であり、清代には程子偉『雪香園』(2)、鼓詞『曹国丈調戯売花娘』(3)、宝巻『売花宝巻』（宣統一年［一九〇九］抄本）、潮州歌『売花記』（聚元堂刊）などが創作された。

造花売りをする書生劉志進の妻を強奪して殺害した曹国丈を包公が裁く話であり、皖南花鼓戯『売花記』不分場(4)、黄梅戯『売花記』不分場(5)などに伝承されている。

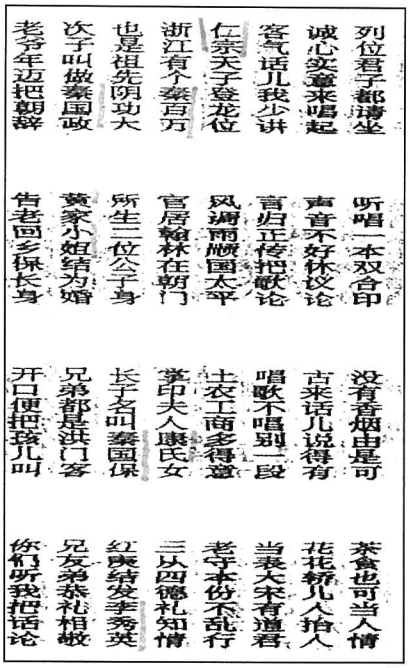


善書『売花姑娘』（仙桃市杜子甫蔵）

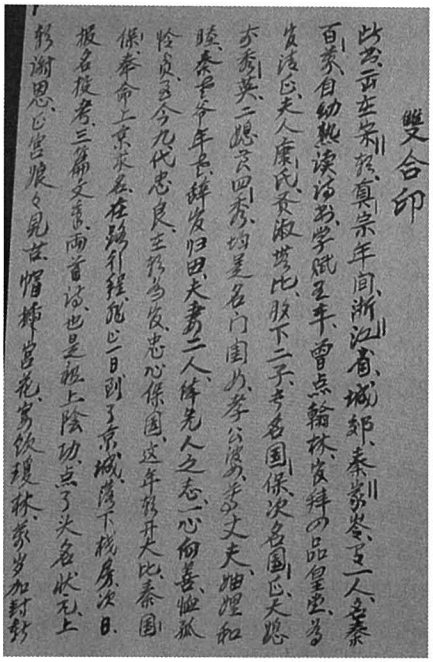
善書では夫が賢妻に救いを求める場面、賢妻が悪人に捕らえられて貞節を守る場面、妻が夫に救いを求める場面、夫が清廉な官吏に救いを求める場面、夫が妻の死を悼む場面などに歌唱が行われ、人倫を尊重する主旨が強調されている。

開封府近郊の書生劉志進は兵糧の護送を命じられて官船が転覆し、張氏に窮状を語る（宣①）。張氏は志進に家産を売却して弁償するよう勧め、造花を売って家計を助けるが、太白金星の示唆を聴かず曹国丈の家の前を通り、曹国丈に屋敷に連れ込まれて妾になるよう強要され、曹国丈を罵る（宣②）。張氏は殺害されて西花園の芭蕉の樹下に埋められ、その霊魂は地獄に行くが、寿命が尽きておらず、夫の夢に現れて報告する（宣③）。志進は包待制に訴える（宣④）。しかしそれは包拯ではなく曹国丈であり、捕まって水牢に監禁される。張氏は志進の災難を悲しむ（宣⑤）。張氏は包拯に訴える（宣⑥）。包拯は曹家を訪問し西花園に入って張氏の死体を掘り出し、水牢から志進を救出する。志進は張氏の死を悲しむ（宣⑦）。包拯は恩赦を認めず曹国丈を処刑し、過陰床・還魂枕を用いて張氏を復活させる。

3．『双合印』（鍾立炎）


列位君子都请坐　听唱一本双合印　没有香烟由是可　茶食也可当人情
诚心实意来唱起　声音不好休议论　古来话儿说得有　花花轿儿人抬人
客气话儿我少讲　言归正传把歌论　唱歌不唱别一段　当妻大宋有道君
仁宗天子登龙位　风调雨顺国太平　士农工商多得意　老守本份不乱行
浙江有个秦百万　官居翰林在朝门　茅印夫人康氏女　三从四德礼知情
也是祖先阴功大　所生二位公子身　长子名叫秦国保　红裙结发李秀英
次子叫做秦国政　黄家小姐结为婚　兄弟都是洪门客　兄友弟恭礼相敬
老爷年迈把朝辞　告老回乡保长身　开口便把孩儿叫　你们听我把话论

説唱『双合印』（荊州市芸術研究所蔵）



善書『双合印』（1999、仙桃市鍾立炎蔵）

この作品は明・馮夢龍編『警世通言』（一六二四）巻十一「蘇知県羅衫再合」に似ているが人名やストーリーがいささか異なり、荊州に伝わる説唱本『双合印』と一致するため、明代の物語を発展させた説唱本に取材した作品だと思われる。

「蘇知県羅衫再合」では、蘇雲が蘭渓へ赴任する途中の船中で徐能に財物と妻を奪われて河に落とされる。妻は徐能の弟徐用に救われて逃走するが途中で出産して羅衫を着せる。徐能は追跡して嬰児を拾って養子とする。嬰児は成長して科挙に及第し御史に任命される。妻は成長したわが子に訴え、徐能は裁かれて一家は再会する。

説唱本は小説のストーリーを踏襲しながら各所に夫婦、親子、隣人など人物の歌唱の場面を設けてその情意を表現している。（行書体の部分が歌詞で、七言と注した歌詞以外は十言である。）善書は説唱本をおおむね踏襲している。いま対照すると以下の表のようである。

説唱『双合印』	善書『双合印』
宋の仁宗の時、浙江の翰林学士秦百万は妻康氏との間に長子国保と次子国政があり、国保は李秀英を、国政は黄小姐を娶っていた。国保は科挙のため上京することになる。 秀英は夫を送別し、国保もその言に答える（7言）。	宋の真宗年間、浙江省郊外の秦家荘に秦百万という四品官吏がおり、その妻康氏、長子国保とその妻李秀英、次子国正とその妻黄四秀の六人で暮らしていた。
国保は状元に及第し、八府巡按に任命されて南京に赴任したが、途中で帰宅して妻を同行させることにする。両親は息子の出世に喜び、家宝の白羅衫を贈って送別の言葉を贈る（7言）。	国保は上京して科挙を受験し、状元に及第して八府巡按に任命され、金印・宝剣を賜って水路南京に向かう。途中秦家嶺に立ち寄ると、姑康氏は妊娠中の秀英に護身用として家宝の白羅衫を贈ると告げる（宣①）。
官船が黒水港に停泊すると五覇山の盗賊鄂成虎らが襲撃する。 国保は水中に投げ込まれ、秀英は官印を奪われて捕らえられる。国保は三叉港に漂着し、漁師夫婦に救われて事情を語る（7言）。	夫婦は黒水港を通過すると、五覇山の山賊鄂成虎に襲われる。 国保は水中に身を投げて漁民万里爽に救われ、事情を語り謝意を述べる（宣②）。
成虎は秀英に求婚するが、秀英は成虎を罵って拒絶する。そこに四弟の羅成が出現し、婚期を融通するよう求める。	秀英は成虎にさらわれて結婚を迫られるが、成虎の義弟羅成が説得して余裕を与えられる。
秀英は成虎の悪行を恨み、国保の子を出産して復讐すると誓う。	秀英は土窖に監禁されて痛哭する（宣③）。
八弟高正鳥は秀英の災難に同情して妻王氏に世話を命じる。王氏は秀英と姉妹の契りを結ぶ。	秀英は飯を運んで来た高雄の妻王氏が善人だと知って義姉妹となる。
婚礼の前夜、正鳥は自殺しようとする秀英を救って麓まで送り、秀英は白雲庵の門前の藁の中に休む。	高雄は見張りの日に秀英の逃走を助ける。 秀英は白雲庵まで逃れて陣痛が起こり稲わらの中に休む。
白雲庵の徒弟年桂は鳳凰が廟に入る夢を見たことを師匠素珍に告げる。	尼僧年貴は夢を見て師匠素珍に告げ、秀英を発見する。
秀英は素珍に実情を告げ、白羅衫に血書して嬰児を託す。	秀英は事情を語る（宣④七言）。
素珍は嬰児を柳樹の穴に入れる。 秀英は尼僧として庵に住む。	素珍は秀英を庵に住まわせる。
天官は玉帝の命を受けて土地神に嬰児を救わせる。	玉帝は文曲星が災難に遭うと知り、太白金星に麒麟星を導かせて秀英の腹から出生させる。 秀英は真宗八年に男児を出生し、素珍は秀英に嬰児をわたすよう命じる。 秀英は血書をつけて嬰児が善人に育てられるよう祈る（宣⑤）。 素珍は嬰児を路傍の柳樹の穴に入れる。
成虎は正鳥に秀英を出せと迫る。正鳥は秀英を逃がしたと告白する。	成虎は高雄に秀英を出せと迫るが、高雄は逃げたのを知らなかったといつわる。
成虎が正鳥を殺そうとすると、羅成が体を張って成虎を阻止する。	成虎が殺そうとすると、羅成がさえぎって弁護し、成虎も羅成を恐れて不問に付す。

成虎は秀英の追跡を命じ、正鳥は血書をつけた秀英の嬰児を発見して家で育てようと考える。 正鳥が羅成に救いを求めると、羅成は成虎にその子を養子とするよう勧める。	羅成の調停で高雄は秀英を追跡し、秀英の子を発見して家で育てようとし、羅成に相談すると、羅成は成虎に話して嬰児は成虎が養うことになる。
成虎は子に天宝と名づけて学問をさせるが、天宝は教師から罵られて父に盗賊をやめさせる。	成虎は子に天宝と名づけて学問をさせるが、天宝は学友とけんかして父が盗賊だと罵られ、父に盗賊をやめさせる。〔上巻〕
浙江の秦百万は国保の消息が無いため国政に調べさせる。国政は五覇山に至って天保のために馬を買い求める成虎に馬を譲らず殺される。	秦百万は国保の消息が無いため国正を南京に派遣する。国正は五覇山に至って天保のために馬を買い求める成虎に馬を譲らず国保の弟だと告げて殺される。
百万は家が三度も火事に遭い病死する。 康氏は夫の死を悲しむ。	国正の妻は悲しんで死に、百万は三度の火事に遭って病死する。康氏は痛哭する（宣⑥）。
天保は上京する途中で馬が浙江の秦家に走り、康氏に遭遇する。康氏は天宝を国保と見まちがえる。 康氏は天宝に家の不幸を語り、天宝を義子として藍の羅衫を贈り朝廷に献上するよう告げる。	天保は上京する途中、馬が浙江の秦家に走ったため康氏に遭遇する。康氏は国保と見まちがえる。 天保が位牌の人物を尋ねると、康氏は家の不幸を語り、天保を義子として家宝の藍の羅衫を贈る。
天宝は状元に及第して駙馬となり、八府巡按に任命され浙江の義母康氏を迎えて赴任する。	天宝は状元に及第して駙馬となり、八府巡按に任命されて浙江の義母康氏を迎える。
天保と王女は五覇山の父に挨拶に行く。	天保と王女が成虎に挨拶すると成虎はめまいがして倒れる。
康氏が官船に残っていると、国政が夢に成虎に殺されたと告げる。	康氏が官船に残っていると、国正が夢に成虎に殺されたと告げる（宣⑦）。
天保が南京に赴任すると、民衆がみな成虎を告訴したため憂鬱になる。 漁師に救われた国保も告訴に来て天保の前に跪くと天保は目がくらんだため訴状を見る。 秀英も釘板に横たわって成虎を訴え、天保の前に跪くと天保は目がくらみ、秀英は訴えを述べる。	天保が告示を貼って庶民に訴えを出させると、一日で三百六十余件の訴状が届く。それはすべて五覇山の山賊を訴えるものばかりであった。 国保も告訴に来て天保の前に跪くと天保は目がくらむ。 秀英も成虎を訴え天保の前に跪くと天保は目がくらむ。
正鳥は妻に事情を話して成虎を訴えに行き、天保に真実を語る。 〔欠36頁〕	正鳥は妻に事情を話して成虎を訴えに行き、天保に真実を語る（宣⑧）。 天保は東の間に白と藍の羅衫を掛けて国保に見せると、国保は家宝の羅衫を見て痛哭する（宣⑨）。
〔欠37頁〕	また西の間に羅衫を掛けて秀英に見せると、秀英も痛哭する（宣⑩）。
秀英は康氏と再会して挨拶をし、康氏も経緯を語る。	天保が父母と認めないでいると高雄が出て秀英に声をかけ巡撫が秀英の子秦咬膀だと告げ、一家は団円する。
巡撫は朝廷に鄂成虎を捕らえるよう上奏する。 成虎はだまされて南京に赴き、巡撫の手で斬首される。 父子はともに八府巡按を務める。	国保は天保に成虎を斬首せよと命じる。 天保は成虎ら盗賊を招いて捕らえ斬首する。 父子はともに八府巡按を務める。

書は説唱本を改編したものと思われ、ストーリーばかりか、以下のように歌詞も酷似している。

説唱『双合印』	善書『双合印』
母が送別の席で嫁に護身用の白羅衫を贈る場面 夫人便把媳婦叫、我有言来你是聴。 我児上任南京去、做是一品正夫人。 随夫上任把印掌、身懐六甲報知音。 我有白羅衫一件、把与我児代在身。 丟在水裡打不湿、火焼七日放光明。 四季不分熱和冷、講此宝衣多称心。 ……	(宣①) 聴説是我児是南京上任、不由我年邁人喜之在心。 我的児初出任官居一品、点状元封巡按年紀太軽。 叫媳婦陪為娘堂前坐定、婆有言叮嚀你細聴分明。 有媳婦随上任掌管大印、幇巡按当内助娘可放心。 凡百事要思忖過細査問、疑難案当参謀大顕才能。 娘還有要緊時対媳来論、児有孕快分娩早報佳音。 祖伝有白羅衫宝衣一件、賜与我媳婦児帯在身辺。 将宝衣放水内霞光展現、火焼七日放光明色沢更鮮。 四季裡寒暑天不分熱冷、穿在身免災厄如意称心。
秀英が白羅衫に血書して子を捨てる場面 実難捨小孩児肝腸劃断、写一封血書字児帯身旁。 白羅衫来扯破当作血表、中指尖咬破了鮮血淋淋。 上写着李秀英頓首百拝、多拝上路途中往来之人。 我家中住址在浙江省城、離省城五里遠秦家荘村。 我公公秦百万黄堂四品、九代人為官職四海聞名。 我丈夫秦国保官高職顕、十八歳封巡按任上南京。	(宣⑤) 白羅衫写血書児作憑証、咬中指当羊毫十指連心。 上写着李秀英頓首叩手、多拝過路君子好善之人。 家住在浙江省離城不遠、城郊外五里路秦家大村。 児祖父秦百万皇堂四品、九代人為官宦四海聞名。 児的父秦国保高官爵顕、十八歳封巡按上任南京。

ただ善書の「宣」は人物が歌唱する場面であるのに対して、説唱本の「唱」は中に語り手の叙述も含んでおり、ここに説唱文芸と善書の文体の相違が見られる。

なお説唱本には国保が科挙のため上京するに臨んで妻と別れを惜しむ場面が設定されているが、善書ではその場面に「宣」が設定されていない。

説唱『双合印』	善書『双合印』
唱歌不唱別一段、当表大宋有道君。 仁宗天子登龍位、風調雨順国太平。 士農工商多得意、老守本份不乱行。 浙江有个秦百万、官居翰林在朝門。 掌印夫人康氏女、三従四徳礼知情。 也是祖先陰功大、所生二位公子身。 長子名叫秦国保、紅庚結髪李秀英。 次子叫做秦国政、黄家小姐結為婚。 …… 不表親朋辞別了、再表秀英小姐身。 十里長亭把夫送、眼含珠涙暗傷心。 「開言便把夫来叫、妻有言来你是聴。 我夫你把京都上、寒来暑往要細心。」 …… 「公子来把賢妻叫、我妻不要細叮嚀。 為夫今日京都上、必奪頭名転回程。」 ……	此書出在宋朝真宗年間。浙江省城郊秦家嶺、有一人、名秦百万。自幼熟読詩書、学賦五車。曾点翰林、官拝四品皇堂、為官清白。夫人康氏、賢淑無比。股下二子、長名国保、次名国正。大媳李秀英、次媳黄四秀、均是名門国女。孝公婆、尊丈夫、妯娌和睦。 …… 這年、朝開大比。秦国保奉命上京求名。 在路行程、非止一日、到了京城。

4.『五子争父』(袁大昌)

この作品は善書『打碗記』と同じように老人虐待をテーマとした作品であり、(6) 実の子が親を大切にせず、親のいない若者が老人を実の親のように世話したり、老人に窮地を救われた若者が恩返しをしたりするなど、勤勉で正直な老人を敬うことを呼びかけている。

○清の道光年間(1821-1850)、広西桂林府白河県の東門城外に許鳳山という老人がいて、妻李氏、長男大慶とその妻周氏・子細哥、次男小慶とその妻祁氏と暮らし、鳳山は山に薪を取り、李氏は家で糸を紡ぎ豚を飼育したが、大慶・小慶夫婦は怠惰で、家に来て強奪した。李氏は病気で倒れて死後を愁え、鳳山は慰める。(①「李氏得病対夫」「回詞」)

○李氏が亡くなると、二人の子と嫁は老人を輪番で養い、大慶は残飯を与えて酷使し、小慶は大雪の日に飯を与えず追い出し、周氏も細哥の嘆願を聞かず老人を家に入れない。(②「細哥向母求情」)

○鳳山は薪を取りに行くが寒くて山神廟に休み悲嘆する。(③「許鳳山破廟自嘆」)

○鳳山は自殺をはかるが、薪を取りにきた鍾氏兄弟に救われ、わけを話す。(④「許鳳山対年軽人」)

○鍾孝・鍾悌には父母がなく、鳳山に山で拾った銀十両を贈る。鳳山は首を吊ろうとしている書生に事情を尋ねると、書生は徐懐建といい、旅銀十両を落としたというので、鳳山は銀を返す。(⑤「徐懐建対老伯」「回詞」)

○鳳山が帰宅して銀十両を拾ったというと、周氏は食事を与えるが、銀を返したと知ると外に追い出す。鳳山は乞食をし、村の老先生に勧世文を書いてもらい、村人に唱って聞かせる。(⑥「唱道情」)

○鳳山は鍾家村まで来て鍾兄弟に保護されて義父となり、鳳山も家事を手伝って過ごす。細哥は学友張旭から祖父の所在を聞いて会いに来るが、鳳山は帰らない。徐懐建は状元に及第して銀千両を鳳山に贈る。大慶は細哥から鳳山の所在を聞き、鳳山に帰宅を促すが、鳳山から罵られる。(⑦「大慶対父親」、「回詞」)。

○大慶・小慶と鍾孝・鍾悌は父親を奪い合って白河県知県李旭東に訴える。(⑧「許大慶具状」) 知県は鍾孝を審問する。(接出鍾孝上堂)

○そこへ八府巡按が巡察に来る。巡按は実は徐懐建であった。(⑨「許鳳山見巡按大人」「巡按回詞」)

○巡按は大慶・小慶の罪を糾弾し、四十大板を加えて県城を掃除させた。細哥には読書の費用として銀百両を贈った。鍾兄弟には桂林府の庫銀千両を贈った。鳳山は巡按と上京して幸福に暮らした。巡按は吏部尚書に昇進して礼部尚書の娘を娶った。細哥は知県に就任して許家を継いだ。大慶と小慶は恥辱を受けて死んだ。周氏と祁氏は悪報を受けて死んだ。

この作品も袁大昌氏が別のジャンルの作品を善書に改編したものと推測される。直接取材した作品は今のところ探し当ててはいないが、同名の文芸作品と民話があり、ここで比較をしてみたい。

まず文芸作品として、河南・湖北で上演される河南墜子『五子争父』があり、録画資料ＶＣＤが出版されている。そのストーリーは次のように展開している。

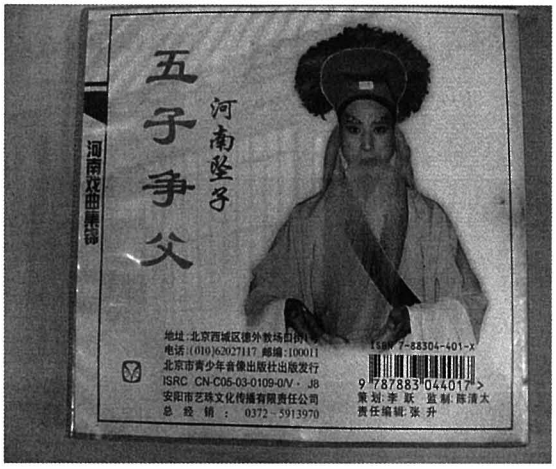
○河南登封県城外に住む許振山夫妻は勤勉であったが、親不孝の二子大懶・二懶とその嫁に召使いのように虐待されていた。

○許老漢は糞を拾いながら村の土地廟の前に来て財布を拾い、持ち主が来るのを待つと、書生が旅銀を落とした書生が現れたため、財布を返して朝飯を食べに帰宅する。書生は科挙に及第したら老人を養父とすると心に誓う。許老漢は息子夫婦に告げると、息子夫婦が早く死ねとののしったため、老妻が悲しみ、老夫婦は家を出て乞食をする。息子夫婦はこれ幸いと門を閉める。

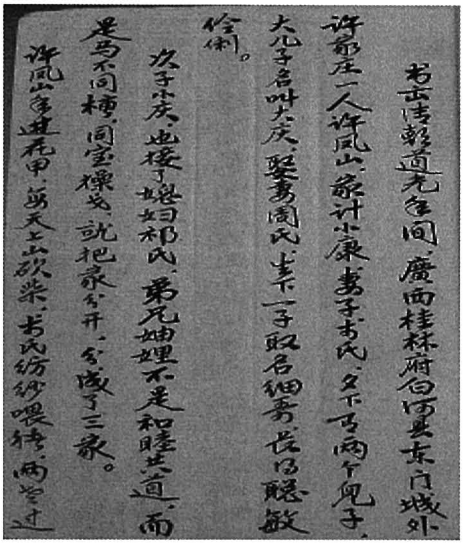
○老夫婦は張家寨に来て、若い嫁の玉蘭に事情を聞かれ、仕方なく子供はいないと告げると、施しを受けたため、ひそかに菜園を手伝う。そこへ張鳳仙・紀仙兄弟が帰宅し、その様子を見て家に招き、玉蘭の提言で老夫婦を養父母として奉養し、一家は勤勉に働いて幸福になる。

○大懶・二懶は賭博に狂い、嫁も怠惰で家は困窮する。二人は恐妻家で、嫁の言うとおり老夫婦を捜しに来て父母を取り返そうとするが、老夫婦は二人を子供と認めず、裁判になる。

その後の経過はＶＣＤの不良のため明白ではないが、おそらく書生が出世して官吏となって裁判を担当し、不肖の大懶・二懶夫婦を懲罰し、孝行な張氏兄弟を表彰して、自分が恩を受けた老夫婦を養父母として引き取ることで終結するものと推測される。不肖の息子が懲罰を受け、虐待を受けた老夫婦が善人や恩を施した人から救われるという勧善懲悪の思想を表現した、単純ながら爽快な物語が農民を楽しませたことであろう。



河南墜子『五子争父』VCD
（1997、北京市青少年音像出版社）



袁大昌『五子争父』

これを袁大昌氏の善書と比較すると、人物名が「許鳳山」「許振山」と似通っているが、老人が金を落とした人に返す場面で、善書では山で遭った少年から施された金を落とし主に返すのに対して、河南墜子では老人自身が銀を拾って落とし主に返すとしたり、善書では科挙に及第した書生が老人に銀千両を贈るのに対して、河南墜子では老人は少年の家で勤勉に働いて幸福になるとしたりするなどの相違が見られ、直接に河南墜子を善書に改作したとは言えない。

そこで次に民話を見ると、江蘇省宜興市の「搶老子」には、山で遭った少年から施された銀を、旅銀を落とした書生に贈ったり、科挙に及第した書生が老人に銀千両を贈ったりする点など類似した場面が見える。(7)

○王老三という老人に二人の息子があり、老三を虐待して冬の山に薪を取りに生かせた。

○老三は薪を拾う若者兄弟に銀十両を贈られて山を下りるが、秀才に遭って旅銀十両を落としたと聞く。老三は兄弟から贈られた銀十両を見せるが、それではないと言うので、秀才が正直者であると知って銀十両を贈り、また山に上って兄弟に会う。兄弟はその話を聞いて感動し、老三を義父として養う。老三の息子たちは老三がいなくなって喜ぶ。

○秀才は状元に及第して銀千両を老三に贈る。二人の不肖の息子は老三を探し当て、老三を父と呼ぶが老三は子と認めない。

○状元の使者は、山の兄弟も老三を父と呼ぶので、四人を県に連行する。

○この時状元が県を視察に来て審問し、老三を恩人だと認め、老三の考えに従って銀千両を山の兄弟に贈り、不肖の息子に五十大板を加え、老三を父として養う。状元は山の兄弟に学問をさせ、妻を娶らせ、官吏にした。

しかしながらこの民話は善書と人物の名前が違うため、善書が直接に民話に取材したとは言えず、善書は民話を改編した演劇作品に取材したと推測されるが、筆者は目下のところその演劇作品を捜し出していない。

なお浙江省徳清県の「五子奪父」は次のようなストーリーであり、河南墜子のストーリーに近い。(8)

○昔、劉老人は勤勉に生活していたが、晩年に妻を亡くした後、二人の子に嫁を娶らせたが、いつも喧嘩をしていた。

○朱秀才が老人の便所を使って財布を忘れていく。

○老人は落とし主を待って朱秀才に財布を返し、このことを息子夫婦に話すと、罵られたため、夕食もとらず、真夜中に家を出て乞食をして暮らす。

○老人は梅雨のある日、麦の取り入れを手伝って、陳兄弟の家に世話になって菜園で蔬菜を育て、その根本から銀を発見して裕福になる。

○老人が六十歳の誕生祝いをした時、老人の家の隣人の飴売りが来て劉兄弟にその様子を伝えたことから、兄弟と嫁は老父を取り戻そうとしてもめる。

○そこへ朱県令が巡察に来て老人を恩人だと認め、不肖の息子夫婦に四十大板を加え、劉兄弟を表彰し、老人を養父して引き取る。

また陝西省安康市の「争老子」は、老人と薪を拾う若者との出会いや、老人が銀を得る経緯の叙述などが異なる。(9)

○昔、豆腐屋の父子があり、父親は善人であったが、二人の息子は賭博や女遊びをする悪人であった。

○ある早朝、老人は道で糞を拾いながら銀百両が入った財布を拾い、落とし主を待って秀才に財布を返し、お金を贈る。だがこれを知った二人の息子は父親を罵り、家から追い出す。

○老人は悲憤が高じて古廟の前で倒れる。古廟には継母から追い出された王兄弟がおり、薪を取って生活をしていた。兄弟は老人を救って義父として世話をする。

○三年後、老人は廟の前で銀一缶を掘り出した。中には遺書があり、老和尚が生前に隠したものであった。老人はこの銀で家と土地を買い、豊かな生活をした。

○不肖の息子は遊興で身代をつぶし、乞食をしてこの村に来て父親を見つけ、自分たちの父親だと言い張るが、老人が子だと認めないため、老人を罵る。王兄弟と隣人は二人を追放するが、二人は王兄弟が豆腐屋の金を盗み、父親を誘拐したと県に誣告する。県令は審問して老人が恩人だと知り、不孝者に四十大板を加えて追放し、王兄弟に官銀三百両を贈って孝義をたたえ、老人を義父として養う。

漢川善書『五子争父』に類似する物語として河南曲劇『三子争父』がある。この作品は王明山の創作で、1981年に河南密県劉寨業余劇団が初演して以来、全国三十余の劇団が上演したという。ストーリーは以下のごとくである。

○書生岳山が路銀を落とす。周老貴は病気で治療費を必要としていたが、路銀を拾っても着服せず、落とし主を待って岳山に返す。岳山は感動して老貴を義父として拝するが、息子積徳とその妻に家を追い出される。

○老貴は病身で乞食をして深山で投身自殺をはかる処を李興夫婦に救われ、養父として保護される。

○岳山が状元に及第して義父を迎えに来ると、積徳夫婦は父親を捜して李興の家に来るが、老貴と李興から罵られ、県に訴える。知県が裁判するところに岳山が到着して事情がわかり、知県は積徳夫

婦を投獄し、李興夫婦・岳山・老貴の人柄を称賛する。

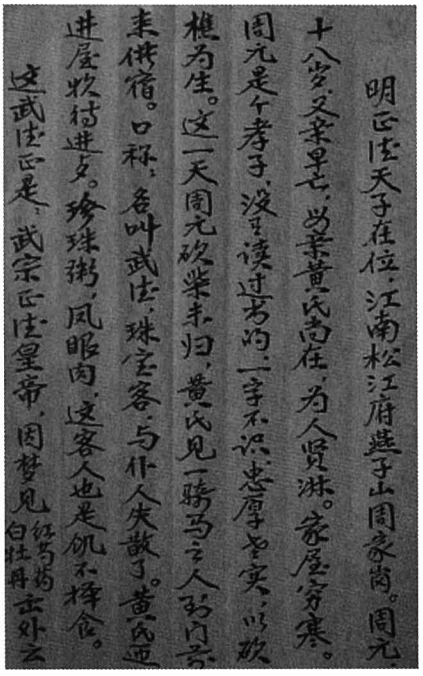
この作品は実際に山東の呂劇、両夾弦、豫劇、柳腔、湖南の花鼓戯、新彊の曲子戯などで上演されて全国的に知られており、河南省洛陽市老城区では、「道徳規範進万家運動」（道徳規範が一万の家に入る運動）の一環として、民間芸人が『三子争父』を上演して家庭美徳を宣揚したと報道しており、江西省瑞金市では、農民が老人を扶養しない風潮に対して『三子争父』などの戯曲を村人に見せて、父母を孝養する風潮を興したと言う。(10)

この『三子争父』のような作品は「社教戯」（社会教育戯曲）と称し、民衆が演劇を堪能している間に知らず知らずに教育を受ける効能が期待されている。（「譲広大農民在自娯自楽、潜移黙化中受到教育」）。(11)『三子争父』と同じく、『五子争父』にもそうした社会教育の意味が濃厚だと言える。

5．『孝子得妻』（別名『鶏換妻』）（袁大昌）

前明正德白牡丹傳　第三十七回　一五〇

第三十七回　天子吃雞做良媒　周元捧扇訂佳偶



『前明正徳白牡丹伝』（上海大達図書供応社排印）　　善書『孝子得妻』（漢川市袁大昌蔵）

この作品は清・翁山の小説『前明正徳白牡丹伝』（全四十六回、光緒十七年〔1891〕）の中の武宗が夢に見た美女白牡丹・紅芍薬を求めて江南に忍び歩きをする一段（第三十五回～三十八回）で、周元の母親が武宗を接待して武宗の仲介で官吏の娘を娶る部分を改編したものである。原作のストーリーは以下のとおりである。

〔第三十六回〕武宗は山東で馬が暴走して周元の家に至り、武徳と名乗る。周元の母王氏は貴人と知り、麦粥を「珍珠粥」と称し、塩蝦を「鳳凰鮭」と称して接待する。周元は薪が売れず伯父王員外に米と換えてもらうと中に銀一錠が入っており、正直に話したので銀五銭を礼として受け取って帰る。〔第三十七回〕王氏は雌鶏を殺して武徳を饗応する。周元が武徳の前で思わず涙を流し武徳がそのわけを聞くと、周元は雌鶏が嫁を娶る資本であったと答える。武徳は誰か官吏の娘で良い娘を紹介すると言う。周元が兵部侍郎呉大材の娘瑞雲を見初めたことを告げると、武徳は扇子に婚姻の勅命を記して周元に渡す。王氏が武宗と知って跪き恩封を請うと、武宗は王氏に一品太夫人、周元に頭等指揮使を贈って三峯岩に向かう。〔第三十八回〕王氏は百官の拝礼を受けて驚き、倒れて死ぬ。呉大材は葬儀の費用を出し、周家は行宮となるため、周元は呉家に住む。〔第四十六回〕周元は母の喪が明けて呉瑞雲と結婚し、呉大材とともに上京する。武宗が山東の珍珠粥を所望したので、周元が作るが飢餓の時ほど美味でないことがわかる。

袁大昌の善書『孝子得妻』ではこの部分を独立させ、孝子周元を主人公として、周元が武宗の仲介で兵部侍郎呉大材の娘を娶ることになるが、悪人が出現して呉玉英を強奪しようとしたため呉玉英が逃亡するという部分を新たに加えて幸福を得るには困難を伴うという趣向を持たせており、孝子と配偶者は周囲の理解と援助を得て苦難を経て幸福を獲得し悪人を懲らしめるという勧善懲悪の物語としている。「宣」は九場面あり、孝子と天子、侍女（娘）と孝子、母と子、母と娘と侍女、姑と嫁、夫と妻の歌詞の応酬を設定して理想的な家族の絆の強さを描いている。ストーリーと「宣」の場面は以下のとおりである。

○江南松江府に住む周元は孝子で薪を売って母親黄氏と暮らしていた。黄氏は武徳と称する宝石商を「珍珠粥」と「鳳眼肉」で接待する。彼は明の武宗で紅芍薬・白牡丹を夢見て旅していたが、馬が暴走してここに宿を借りたのであった。周元は兵部侍郎呉大才の娘の容貌に見とれて呉家の家僕に叱られ、薪も売れず伯父に銀を贈られて帰宅した。黄氏は雌鶏を殺して武徳を饗応したが、周元は盗み食いして涙を流し、客人の問いに雌鶏は結婚の資本であったと告げた。客人は呉大才の娘との結婚の仲介を約束し、周元を義理の子とした（①周元対客人・回詞）。

○周元と黄氏は武徳が皇帝だとは知らず書信と玉佩を受け取り、武徳を見送った後、武徳の言うとおり呉大才を訪問する。呉大才は詔勅を見て娘玉英との結婚を承諾する。だが吏部侍郎鄧徳彪の子世祥が呉玉英の美貌を見て横恋慕し、周元母子の殺害を謀る。侍女梅香はこの消息を玉英に知らせ、玉英の命を受けて周元に紋銀百両と玉魚を贈りに行き、途中で周元に会って事情を話し上京して義父に訴えるよう促す。周元は謝意を表し上京して悪人を告訴すると誓う（②梅香丫環対周元・回詞）。

○周元母子は杭州の伯父黄水清の家に避難する。黄氏は周元の出発に際して成功を祈り、周元も母の期待に応えると誓う（③黄氏対子・回詞）。

○鄧世祥は周家に放火して呉大才に婚姻を迫ったため、呉大才は玉英に逃亡させる。母張氏は玉英に男装して逃亡するよう促すが、玉英は自分が死なないと鄧世祥は呉家に危害を加えることを恐れたため、侍女春香は玉英の代わりに嫁ぐことを提案する（張氏対女・回詞・接出春香対夫人）。

○春香は鄧家に嫁いで世祥の殺害を謀ったが成功せず殺される。玉英は侍女と逃亡したが山中で虎に遭って生き別れ、河の前で悲嘆する（⑤呉玉英自嘆）。

○玉英は河に身を投げるが漁師黄水清に救われる。黄氏は玉魚を見て不思議に思う。玉英は黄氏に事情を語る。黄氏は偶然に嫁と会えたことを喜ぶ（⑥呉氏玉英対黄氏〔未来的婆媳会〕・回詞）。

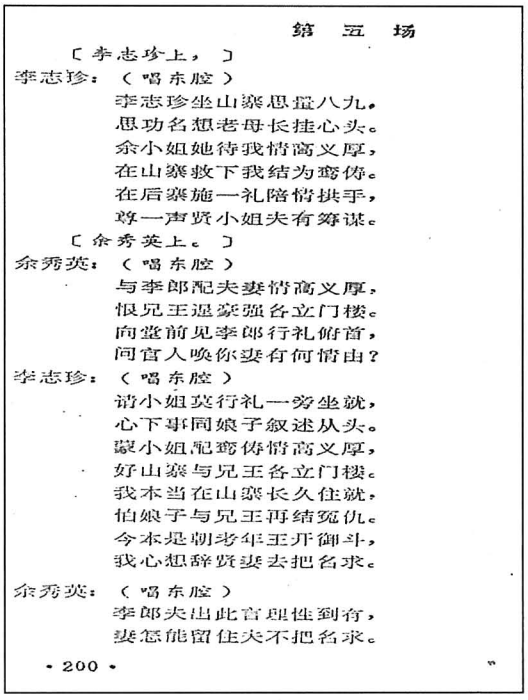
○周元は上京して梁相国に玉佩を見せる。梁相国は武徳が皇帝だと教え、代わりに事件を上奏する。十府巡按劉鵬挙は鄧世祥の逮捕を命ぜられ、周元とともに松江に向かう。鄧世祥は審問されて犯罪を自供する（⑦鄧世祥上堂見巡按）。

○呉大才夫妻は逃亡中に鄧世祥の処刑場で周元と再会する。周元は杭州に母を迎え、玉英と再会して松江に連れ帰る。玉英は母と再会して感慨を述べる。母も悪人が処刑されて幸福が取り戻せたことを喜ぶ（⑧母女会：玉英対母・回詞）。

○周元と玉英は婚礼を挙げ、感慨を述べる（⑨洞房叙情：周元対小姐・回詞）。

○周元夫妻と黄氏は上京し、途中で生別した侍女とも再会する。武宗は珍珠粥を食べたくなり、周元が作って進上する。

6．『三宝記』（袁大昌）


第　五　场

〔李志珍上，〕

李志珍：（唱东腔）

李志珍坐山寨思量八九，
思功名想老母长挂心头。
余小姐她待我情高义厚，
在山寨救下我结为鸾俦。
在后寨施一礼隔情拱手，
尊一声贤小姐夫有筹谋。

〔余秀英上。〕

余秀英：（唱东腔）

与李郎配夫妻情高义厚，
恨兄王逞豪强各立门楼。
向堂前见李郎行礼俯首，
问官人唤你妻有何情由？

李志珍：（唱东腔）

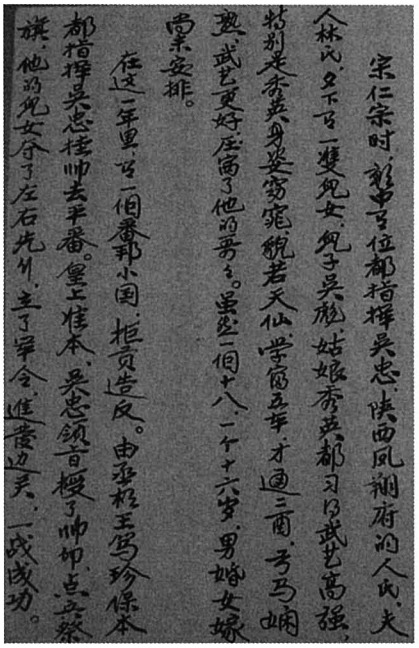
请小姐莫行礼一旁坐就，
心下事同娘子叙述从头。
蒙小姐配鸾俦情高义厚，
好山寨与兄王各立门楼。
我本当在山寨长久住就，
怕娘子与兄王再结冤仇。
今本是朝考年王开御斗，
我心想辞贤妻去把名求。

余秀英：（唱东腔）

李郎夫出此言理性到有，
妻怎能留住夫不把名求。

・200・

東路花鼓『平頂山』


宋仁宗时，彰中五位都指挥吴忠，陕西凤翔府阎人氏，夫人林氏，生下一双儿女，儿子吴彪，姑娘秀英，都习得武艺高强，特别是秀英身姿窈窕，貌若天仙，学得五年，才通三面，弓马娴熟，武艺更好，压倒了他的弟弟。虽然二个十八，一个十六岁，男婚女嫁，当来安排。

在这一年里，西二伯番邦小国，拒贡造反。由丞相王写珍保本都指挥吴忠挂帅去平番。皇上准本，吴忠领旨授了帅印，点兵祭旗，他的儿女守了左右先锋，主了军令，进发边关，一战成功。

善書『三宝記』（漢川市袁大昌蔵）

この作品は「包公案」の花鼓戯『平頂山』を改編した作品であり、書生が科挙を受験するため上京する途中で山賊に捕らわれるがその妹と夫婦になって難を逃れ、贈り物の宝物を持って旅館に泊まって悪人に宝物を奪われて殺される。妻は書生の母と遭遇して同じ旅館で危害を加えられそうになるが書生の亡霊によって救われ、包公は悪人を裁いて書生を復活させる。東路花鼓『平頂山』十三場は以下のようなストーリーである。(12)

絳州龍門鎮の李志珍は父李槐徳が奸臣に殺された後、母郭氏の手で育てられ、科挙を受験するため上京するが、平頂山で山賊余彪に捕らえられ剥皮亭で殺されそうになるが、その妹秀英と夫婦となって危機を逃れ、紫金杯・還魂帯・玉閣屏の三種の宝物を贈られて下山する。志珍は王小二の旅館に泊まり、玉閣屏の仙女に銀を出させる。左丞相の王独君は鴛鴦壷に毒酒を盛って志珍を毒殺するが、宝物を試すと大留璃鬼が現れる。郭氏は志珍を捜して上京し、秀英も男児を出産して上京し、二人は遭遇して小二の旅館に泊まる。小二は旅館に放火するが、志珍の亡霊が夢に現れて二人を逃亡させ、小二に取り憑いて自首させる。包公は志珍の訴えを聴いて王独君を招待し、小二の証言を得て兵役を科す。包公は陰陽扇で志珍を復活させる。余彪も朝廷に帰順して官職を授かる。

善書はこの作品が勧善懲悪を主題とする物語であるところからこの作品に取材したと考えられる。ストーリーと「宣」の場面は以下のとおりであり、母と子、妻と夫、嫁と姑の歌詞の応酬を設定して家族の絆の強さを描いている。

○宋仁宗の時、都指揮呉忠は丞相王篤珍の推挙によって番国を平定するが、番国が献上した三宝を隠匿した罪で兵部尚書李文鼎に弾劾されて一族は誅殺され、呉彪と秀英は逃亡する。王篤珍は李文鼎を恨んで讒言し、その妻郭氏と子志貞は帰郷する。郭氏は科挙のため上京する志貞を送別するに当たって教訓を垂れ、志貞も清廉な官吏になることを誓う（①郭氏対子・回詞）。

○志貞は平頂山を通過して山賊となった呉彪に捕まり、素性を告げると仇敵として剥皮亭に縛られる（②李志貞見大王）。

○志貞は母親を置いて死ぬ悲運を嘆く（③李志貞自嘆）。

○秀英は志貞を見て縄を解いて事情を聞く。志貞は秀英に救いを求め、秀英は夫婦となることを条件に志貞を救う（④志貞見女大王）。

○呉彪は秀英に敗れて志貞は許される。秀英は志貞に還魂帯・紫金杯・美人瓶を贈って送別し、志貞のその恩に感謝する（⑤餞行：秀英対夫・回詞）。

○志貞は王孝の旅館に宿泊し、丞相王篤珍の謀計で毒殺されて宝物を奪われる。郭氏は子を捜して上京し、涼亭で秀英と遭遇する（⑥郭氏対小姐・回詞）。

○王篤珍は王孝に命じて旅館に放火させるが、志貞が夢で知らせて二人を避難させる。秀英は開封府

に訴え、王孝は犯行を自供する（⑦吳秀英具状・接出王孝上堂）。

○包公は王丞相を宴会に招待して審問し、王篤珍は自供を拒むが、包公の審問に屈して自供する（⑧王篤珍宣詞・包公回詞）。

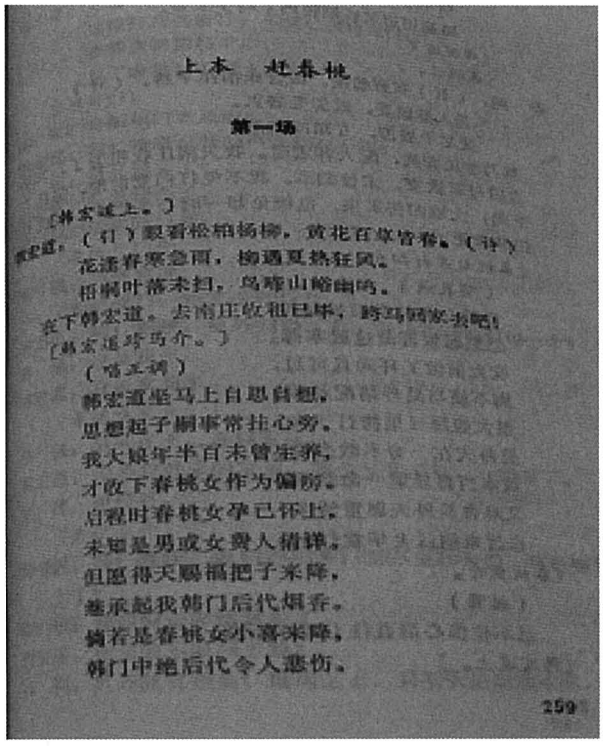
○包公は白宝扇で志貞を蘇生させ、夫婦は再会を喜ぶ（⑨李志貞対妻・回詞）。

○包公は王篤珍と王孝を処刑し、吳彪も恩赦によって官職が与えられる。

なお両作品はストーリーばかりではなく歌詞においても類似性が見られる。たとえば⑥郭氏対小姐は次のように花鼓戯『平頂山』第十一場の歌詞を踏襲している。

花鼓戯『平頂山』第十一場	袁大昌『三宝記』⑥郭氏対小姐・回詞
〔郭氏〕請姑娘免行礼涼亭打坐、 年邁人訴情由你且聴着。 論我家住絳州龍門県所、 立祖住李家莊祖籍来落。 我老爺李槐德老身姓郭、 所生下志珍児秧苗一棵。 朝考年児進京別下老母、 却縁何去許久無有下落。 …… …… …… 問大姐独一人身向何所、 你懐中抱的是哪家孫哥。	這小姐問来歴一言難尽、 萍水逢聴老身細説苦情。 家住在山西省龍門県境、 南門外李家坮詩礼門庭。 老爺夫李文鼎性情直耿、 在朝中做過了兵部大臣。 有一子名志貞秀才身份、 大比年離家郷進京求名。 到如今有三年杳無音信、 我在家望穿秋水望不回程。 …… 問小姐住何地娘家貴姓、 身揹包帯小児何処探親。

7．『状元尋母』（袁大昌）


上本　赶春桃

第一场

〔韩宏道上。〕

韩宏道：（引）眼看松柏杨柳，黄花百草皆春。（诗）

花逢春寒急雨，柳遇夏热狂风。

梧桐叶落未扫，乌啼山峪幽鸣。

我下韩宏道。去南庄收租已毕，跨马回家去吧！

〔韩宏道跨马介。〕

（唱工调）

韩宏道坐马上自思自想，

思想起子嗣事常挂心旁。

我大娘年半百未曾生养，

才收下春桃女作为偏房。

启程时春桃女孕已怀上，

未知是男或女费人猜详。

但愿得天赐福把子来降，

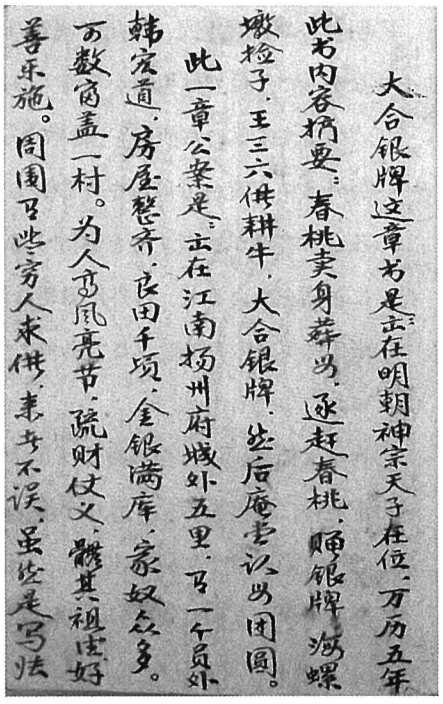
继承起我韩门后代烟香。

倘若是春桃女小喜来降，

韩门中绝后代令人悲伤。

259

提琴戯『大合銀牌』


大合銀牌这章书是：出在明朝神宗天子在位，万历五年，

此书内容概要：春桃卖身葬母，逐赶春桃，赃银牌，海螺

墩检子，王三六佃耕牛，大合銀牌，岳后庵出认母团圆。

此一章公案是：出在江南扬州府城外五里，马一千员外，

韩宏道，房屋整齐，良田千顷，金银满库，家奴众多。

百数家盖一村。为人豪凤亮节，疏财仗义，赈其祖宗好

善乐施。周围马些穷人求佛，来者不误，虽然是写法

善書『状元尋母』（漢川市袁大昌蔵）

この作品は提琴戯『大合銀牌』十場を改編した作品である。提琴戯『大合銀牌』のストーリーは以下のごとくである。(13)

〔一〕韓宏道は妻姚氏との間に子ができず春桃を側室に迎えて懐妊したと語り、春桃は侍女から側室になって姚氏に虐待されることを嘆く。帰宅した宏道は春桃をいたわるが、伯母の家から帰宅した姚氏は盗み聞きして宏道の前で春桃を打ちすえる。たまらず春桃が宏道に姚氏に子を要求させると、姚氏は甥を養子にすると言う。姚氏は宏道が春桃をかわいがるので追放を命じ、宏道は別れに臨んで春桃に銀牌の半分を証として贈る。〔二〕春桃は雨を避けて冷坡廟で一子を出産し、通りかかった獣医王三六に事情を話して銀牌と嬰児を託し、白雲庵の尼僧となって子供との再会を待つ。〔三〕王三六は一子を姉の一女と交換して養ってもらう。姉婿余金礼は嬰児を官宝と名づける。〔四〕王三六は姉婿に耕作牛を借りに来るが口論して帰る。〔五〕宏道は子が生まれず善行に励み、王三六の債権を焼いて子が無い原因を話し、春桃の出産を聞いて王三六に子を連れ戻すよう依頼する。〔六〕官宝は王春六を訪問し、科挙を受験することを告げて同行を求める。〔七〕官保は書生たちと上京する。〔八〕官保は状元で及第する。〔九〕官保は王三六を同伴して帰郷する途中、白雲庵で春桃と会って実母と認め、一緒に帰還する。〔十〕王三六は韓宏道と余金礼の前で官保と養女の結婚によって親戚関係を結ぶことを提案する。

袁大昌『状元尋母』は、韓宏道が身売りする春桃との出会いから語り始め、正妻が養子に裏切られて春桃を追放したことを後悔し、それを契機として宏道が善行によって実の子と出会い、残酷な正妻が死去するという勧善の場面を設定するところに特色がある。

○明神宗の万暦年間、揚州府城外の員外韓宏道は慈善を好んでいたが、妻厳氏は悪女で手が着けられなかった。員外は揚州から帰宅の途中、身売りする少女を見て事情を聞くと、少女は李春桃といい、安徽省来安県から飢饉を逃れて来たと言う（①春桃対員外）。

○員外は棺を買って母親を埋葬してやり、春桃を家に入れる。厳氏は春桃を側室とすることに同意するが、春桃が懐妊すると虐待する。員外は厳氏が実家に帰った時に春桃に食事を与え、春桃は員外に苦痛を訴えるが、員外は耐えるよう説得する（②李春桃対員外・回詞）。

○厳氏は実家の者に唆されてますます春桃をいたぶり、春桃の言を聞かずに追い出す（③厳氏罵春桃・回詞）。

○春桃は福神祠に休む。員外は長命富貴の銀牌を持って春桃を追いかけ、土地廟で追いつく。春桃は土地神に苦衷を訴え、員外は銀百両を贈って尼寺に隠れるよう告げる（④春桃対夫・回詞）。

○春桃は海螺墩で男児を出産して銀牌を嬰児の首にかけ、通りかかった王三六に事情を語って嬰児を託す（⑤李春桃対大伯・回詞）。

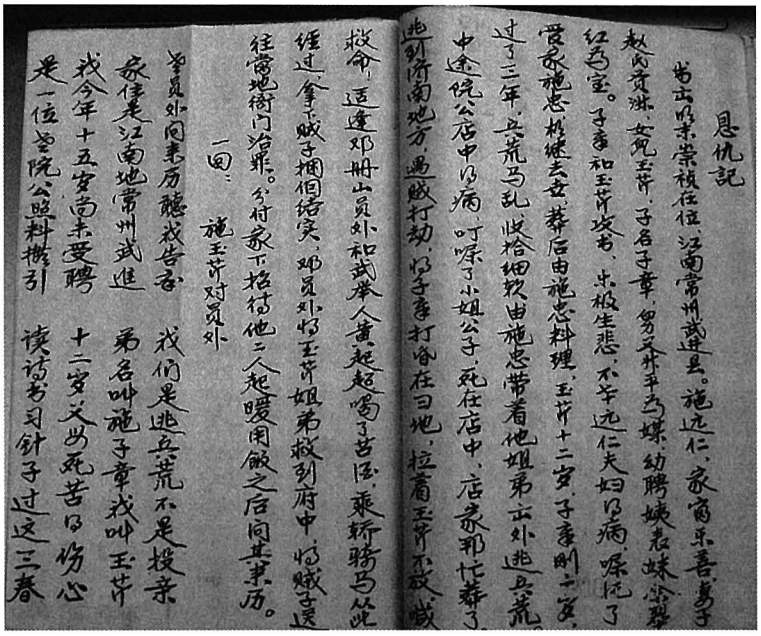
○王三六は女児が生まれた妹に取り替えさせ、吝嗇な妹壻呉登銀は嬰児に得宝と名づける。八年後に呉登銀は王三六に耕作牛を貸すことを惜しみ、王三六は宏道から借りて感謝する。厳氏は親族の継生を養子とするが、継生を叱って負傷させたため張氏に罵られ、春桃を追い出したことを後悔する（⑥張氏罵厳氏・接出厳氏答詞）。

○宏道は子が無ければ財産があっても無駄と考え借用証文を焼き捨て、王三六はそれを見て宏道に子があることを告げる（⑦王三六対員外）。

○宏道は呉登銀を訪問するが、登銀が否定したため余潜県に訴え、県令陳明は被告と証人を審問する（⑧呉登銀上堂・接出王三六上堂）。

○陳明は宏道と得宝が持つ半分の銀牌が符合して王氏も証言したため二人を親子と認め、両家に親戚として交際するよう審判を下す。厳氏は寝ぼけたまま部屋を出て敷居に脚をとられ、頭を打って死去する。得宝は宜春と改名して科挙に状元で及第し、杭州の紫雲庵に焼香して母が見つかるよう祈ると、尼僧が母だと名のる（⑨韓宜春焚香・回詞〔認子〕）。

8．『恩讐記』（袁大昌）


恩仇記

善書『恩讐記』（漢川市袁大昌蔵）

揚劇『恩讐記』（一九五七、江蘇人民出版社）、潮劇『恩讐記』(14) を改編した作品で、娘が軽率に男と夫婦の約束をしたため父を亡くし身を滅ぼすことになり、書生は男が姉婿と知って私情を捨て大義を取って処刑するという物語である。原作のストーリーは以下のごとくである。

施子章は幼時に銭素雲と婚約していたが、戦乱に遭って父母を亡くし杭州の姉秀琴の家に身を寄せる。

素雲も戦乱を避けて杭州の卜員外の侍女となり菊香と称する。卜家の娘巧珍と一緒に西湖を散策した時に子章と再会するが、巧雲はハンカチを落とし、秀雲の夫鄧炳如が拾って王安邦という偽名を使って巧珍の部屋を訪れ夫婦の契りを結ぶ。巧珍は妊娠して素雲に打ち明け、素雲が炳如を問い詰めるが責任を取らず、巧珍の父は巧珍の妊娠を知って憤死する。子章は順天府に赴任し、素雲に秀琴夫妻と一緒に上京するよう勧める。素雲は巧珍と一緒に上京し、その途中で炳如に遇って結婚を迫るが巧珍が殺される。子章は素雲のから事情を聴くが、秀琴が夫を救ってほしいと嘆願したため、恩讐の狭間に苦しむ。素雲は公明正大な裁きを求め、子章も私情を捨てて炳如を処刑する。

袁大昌が改作した善書『恩讐記』も人名などが異なるが、原作とほぼ同じストーリーである。(下集を欠く。)

○明の崇禎年間、江南常州武進県の施遠仁は妻趙賢淑、娘玉芹、息子子章があり、子章は幼時に余翠紅と婚約していた。だが父母が相次いで亡くなり、戦乱が起こって家僕施忠に連れられて避難したが、施忠も死に、二人は済南府まで逃げて賊に襲われるところを員外鄧冊山と武挙黄起超に救われ、鄧員外の家に保護された。玉芹は員外に事情を話した（①施玉芹対員外)。

○員外の子鄧炳如は学問ができず玉芹を追い回し、玉芹も報恩のため一年後に結婚することにしていた。鄧員外は子章に科挙を勧め送別をした（②鄧員外与子章餞行・回詞)。

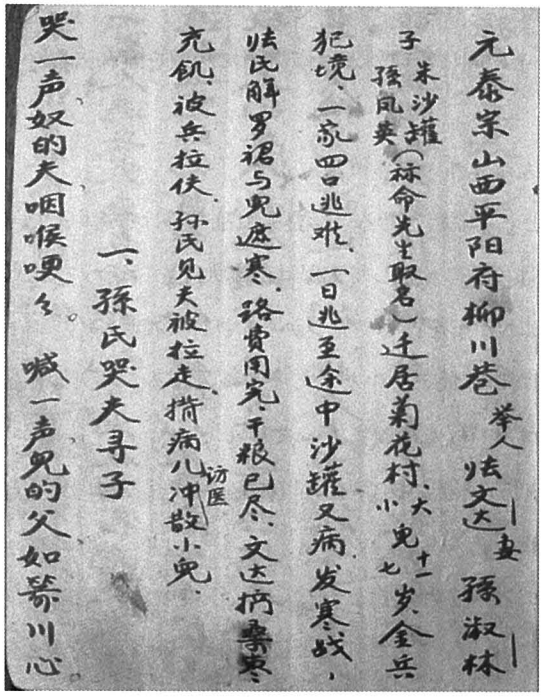
○済南府の卜蠡成員外の娘巧珍は侍女菊香を同伴して清明節の墓参をしたところ、ハンカチを落としたことに気づき取りに戻ると、王化名と称する公子が拾って返し、巧珍は王公子と夫婦の契りを結ぶ（③還帕公子対小姐・回言)。

○菊香は員外に巧珍が風邪を引いたとごまかす。巧珍は自分の軽率な行為を反省して自害を図る（④卜巧珍繡楼自嘆)。

○巧珍の妊娠を知った員外は巧珍を罵り、巧珍は軽率をわびる（⑤卜員外罵女・回言)。

○員外は怒りの余り自害し、巧珍は菊香と家を出て王公子に遭遇してその無責任をなじるが、王公子は実名を告げて責任を回避する（⑥卜巧珍対相公・回詞)。(下集に続く)

9．『尋児記』（徐忠德）


元泰宗山西平阳府柳川巷 举人张文达 妻 孙淑林
子 朱沙罐 孙凤英（祥命先生取名）迁居菊花村、大小兒十一七岁、金兵
犯境、一家四口逃难、一日逃至途中沙罐又病、发寒战、
张氏解罗裙与兒遮寒、路费用完、干粮已尽、文达病暑寒
充饥、被兵拉伕、孙氏见夫被拉走、揹病儿（访医）冲散小兒、
一、孙氏哭夫寻子
哭一声奴的夫咽喉哽々、喊一声兒的父如鬰川心

善書『尋児記』（漢川市徐忠德蔵）

この作品は京劇『三進士』（別名『八珍湯』）を改編したものであり、孝心を主題としている。『三進士』は以下のようなストーリーである。(15)

山西平陽の書生張文達は周家と常家から旅費を借りて科挙受験のため上京する。文達の妻孫淑琳は借金が返せず、二児朱沙貫・孔鳳纓を奪い去られ、二児は後に進士に及第する。孫氏は夫を尋ねて上京するが洛陽で病気となり、知府常天保の家に身売りする。孫氏は知府夫人のために「八珍湯」を作るが、夫人の口に合わず打たれる。常天保は通判周子卿（孔鳳纓）が贈った誕生祝いを孫氏に周家に突き返させ、周夫人は孫氏から事情を聴いて周子卿の母だと知る。子卿は常家で孫氏を母と認めるが、天保は家僕を母とするのは体面が悪いと考えて母と認めず、二人が争って巡按府に訴えると巡按は文達であり、常天保夫妻は反省して一家は団円する。

これに対して徐忠德『尋児記』のストーリーは以下のようである。その特徴は家族のきずなを確かめ合う「宣」の場面が多い。

○元・泰宗の時、山西平陽府の張文達は妻孫淑林と子朱沙罐・孫鳳英を連れて金軍の襲来を避ける途中で金兵に連行され、妻孫氏は病気の沙罐を背負いながら医者を捜すが、孫鳳英とはぐれて悲しむ

(①孫氏哭夫尋子)。

○孫氏は宿を求め医者の処方に従って薬を作り、一人嘆く(②孫氏煎藥嘆五更)。

○孫氏は宿代を作るため髪を売りに行くが、その間に常員外が家僕常徳に沙罐を連れ去らせたため、孫氏は泣き出す(③孫氏哭兒)。

○常夫人は沙罐が常員外の浮気を疑う(④安人対員外・員外回詞)。

○常員外は沙罐を天保と名づけ周学良を教師として読書させる。学良も戦乱を避ける途中で鳳英を拾って子卿と名づけ養育していた。天保と子卿は科挙に及第して天保は洛陽太守を授かって趙氏を娶り、子卿は知県を授かって鄭賢貞を娶る。孫氏はわが子を捜して見つからず憔悴して嘆く(⑤孫氏自嘆)。

○常徳は天保の誕生祝いに八宝飯を作らせるため孫氏を女中として屋敷に入れるが、天保は巡按の到来を知って誕生祝いを控えるよう夫人に告げる(⑥府官対夫人・夫人回詞)。

○八宝飯が生煮えなので天宝と趙氏は孫氏を打ち、罰として周家に礼物を返させる。周夫人は女中に素性を聴き、子卿の母だと知る(⑦退礼会媳・夫人自思)。

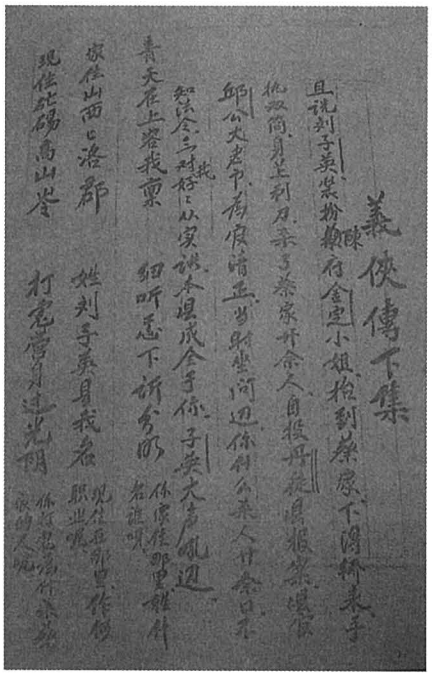
○夫人は帰宅した子卿に母の来訪を知らせる(⑧周子卿対夫人・夫人宣・子卿宣・夫人宣)。

○子卿は周家を訪れて母だと認めるが、天保は体面を考慮して母と認めようとせず、夫人も賛同する(⑨常天保自思・接出夫人)。

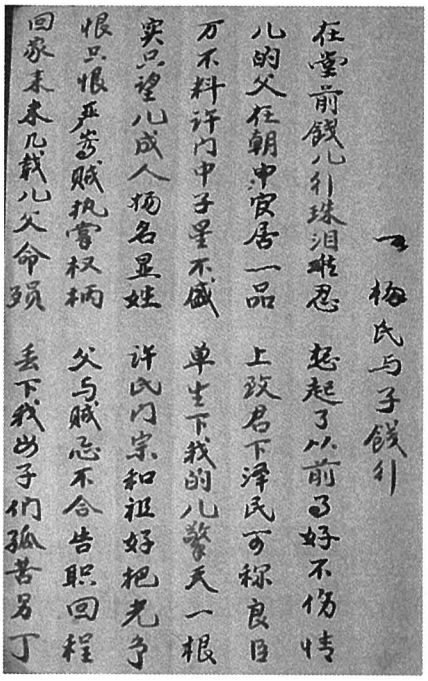
○幼時の靴を証拠とするが、天保は母と認めず巡按府に訴えるが、常徳が証言するが、天保は母と認めない。孫氏が巡按を見るとそれは文達であり、孫氏は天保を罵る。(⑩周子卿見大人・常徳見大人・常天保見大人・孫淑林見大人・孫淑林罵子)。

○天保と趙氏は家を亡くして短命で死亡し、常員外も子を奪った報いを受けた。

10.『劉子英打虎』(徐忠德)



何文甫『義侠伝』



徐忠德『劉子英打虎』

この作品は黄梅採茶戯『劉子英打虎』上本十四場・下本十九場の物語によっている。(16)

物語は以下のように、悪辣な家僕劉青が主人許蛟春を殺害して蔡家の婿になりすまして蛟春を迫害するが、打虎将の劉子英が出現して劉青を撃退し許蛟春を援助するという勧善懲悪、因果応報の主旨をもつストーリーである。

〔上本一、見駕〕劉明奇・羅定山・許元標・蔡金龍は嘉靖帝に拝謁する。〔二、拝寿〕劉子英は山西省平陽府西羅県の人で、羅定山・許元標・蔡金龍とともに父劉明奇の誕生日を祝い、宴席で蔡は許に指腹婚約を提案し、書信・蟒袍を証拠の品とした。〔三、蒙冤〕厳嵩は嘉靖帝に劉明奇が敵国と内通していると誣告して明奇と妻趙氏を斬殺し、劉子英と妹翠英は逃走する。〔四、落草〕子英は翠英とはぐれ山中で虎を打って生計を立てる。翠英は宿を探して歩く。羅定山は許元標を訪ねて劉家の災難を告げると元標は血を吐いて死ぬ。定山は官職を棄てて羅家寨で山賊となる。〔五、訓子〕元標の妻楊氏は夫の死後、蛟春に読書を命じる。〔六、訓女〕蔡夫人は広東で娘蘭英に蛟春との婚約を告げ、刺繍裁縫に励むよう命じ、蘭英の要求に応じて家僕に侍女を捜させる。〔七、売身〕翠英は蔡家の家僕に身売りを求め、蔡夫人に春香と称して身上を語り、蔡夫人は娘の友人として家に入れる。〔八、下書〕蔡金龍は蘭英の結婚を考え、家僕蔡保を北京の許家に送る。〔九、辞娘〕蛟春は蔡保を迎え母に別れを告げて、婚約の証を持ち家僕劉青を従えて広東へ向かう。〔十、遇難〕劉子英は芒碭山で虎を打って生活する。劉青は蛟春を打ち殺して書信と証を奪うが、太白金星が蛟春を保護する。〔十一、〕劉子英は蛟春を救う。〔十二、疑婿〕劉青は蔡家を訪れて蛟春と名のり、蔡保は容貌が似ていないと思うが、蔡金龍は証を見て婿だと信じる。蔡保は蔡夫人に知らせ、蔡夫人は侍女春香に劉青を観察させる。〔十三、計婚〕春香は夫人に劉青が婿ではないと告げ、夫人は侍女月蘭を代わりに嫁がせる。〔十四、買衣〕劉子英は蛟春のために衣服を買い、ともに広東へ向かう。〔下本一、惨死〕劉青と娘の婚礼の日、蔡金龍は蛟春を婿と認めず打ちすえる。劉子英は救出に行くが盗賊として追われ、死んだ蛟春を棺に入れて荒野に埋める。深夜、墓荒らし臭爬虫が棺を開くと蛟春は蘇生する。〔二、宿廟〕蛟春は逃げて古廟に隠れる。〔三、緝許〕南河県の周知県は兵糧を盗んだ棋盤山の山賊坐山虎を追跡させ、蛟春は坐山虎が白馬廟に祈って廟神に掛けた蟒袍を身につけ、王貴・李升は白馬廟に犯人の逮捕を祈願して蛟春を発見し盗賊として捕らえる。〔四、審許〕周知県は王文進と偽称する蛟春を審問し、盗掘によって蘇生したと聞いて臭爬虫を審問し、その証言で蛟春を釈放する。〔五、認許〕蛟春は蔡家の花園に迷い込んで劉青に捕らえられ、再び周知県に審問されて真実を語ると、周知県は蛟春が恩人許元標の子と知って役所にかくまう。〔六、冤雪〕劉青は南河県で真実が明らかになることを恐れて妻に実情を話して駆け落ちを図るが、月蘭は侍女だと明かして拒絶したため、月蘭を殺して逃げる。蔡金龍は侍女春香から真実を聞き、周知県に蛟春の釈放を求める。〔七、趕考〕蛟春は科挙を受験するため周知県と別れて上京する。〔八、赴考〕蛟春は山賊坐山虎に捕らえられる。〔九、〕劉青は宛平県に帰って蛟春の命令と偽り、許夫人を連れだして途中で殺そうとするが、劉子英が出現して夫人を救う。子英が蛟春の死を告げると楊

氏は悲しむ。〔十、発兵〕羅定山は子英と楊氏に会って素性を知り、楊氏は経緯を定山に語る。子英は定山から兵を借りて広東に向かう。〔十一、戦蔡〕子英は蔡金龍と戦うが敗北する。〔十二、打寨〕子英は敗走して坐山虎と再会し、棋盤山の頭領となって捕らえられた蛟春と再会して旅費を与えて科挙を受験させる。〔十三、高中〕蛟春は状元に及第する。〔十四、拝師〕廬山老母は弟子馬騰雲に劉子英と前世の姻縁があると告げ三宝を与えて下山させる。〔十五、戦馬〕雲南省金山寨の馬騰雲は朝廷を攻撃し、嘉靖帝は厳嵩の推挙で蛟春を出陣させ、騰雲の要求に従い子英を下山させる。〔十六、迎劉〕蛟春は子英を迎えに行く。〔十七、掛帥〕子英は元帥に任命される。〔十八、会陣〕子英は金山寨で騰雲の捆仙縄で捕捉されて結婚を承諾する。金山寨は平定され、子英と蛟春は厳嵩を弾劾して厳嵩は斬首される。〔十九、団円〕子英と蛟春は広東の蔡家を訪れ、蛟春は蘭英と翠英を娶る。

黄梅採茶戯『劉子英打虎』と漢川善書（徐忠徳『劉子英打虎』・何文甫『義侠伝』）の歌詞を比較すると次のように一致している。

黄梅採茶戯『劉子英打虎』	徐忠徳『劉子英打虎』	何文甫『義侠伝』
〔上本〕第五場〔訓子〕	①楊氏与子餞行	①楊氏夫人与子嬌春餞行
有老身坐客堂泪流往外、	在堂前餞児行珠泪難忍、	叫嬌春上前来席前坐定、
想起了老爺夫好不悲傷。	想起了従前事好不傷情。	為娘的有番話児聴分明。
表家郷住北京宛平県上、	児的父在朝中官居一品、	想当初你的父官居極品、
老爺夫許元標老身姓楊。	上致君下沢民可称良臣。	曽与那広東省蔡府定親。
在朝中秉忠心輔佐皇上、	万不料許門中子星不盛、	無媒酌以明珠蟒袍為証、
恨好賊害忠良含恨命亡。	単生下我的児擎天一根。	故而他每次里信来我們。
我二老配夫妻婦随夫唱、	実只望児成人揚名顕姓、	幸我児你今年得了僥倖、
生下了許嬌春一根苗秧。	許氏門宗和祖好把光争。	応当要我的児前去招親。
実指望小嬌春早登金榜、	恨只恨厳嵩賊執掌権柄、	娘今日備酒菜勧你少飲、
因此上命孩児苦読文章。	父与賊意不合告職回程。	無非是叮嘱你一路小心。
転而来我就把嬌春叫上、	回家来未幾載児父命殞、	雖説是有劉青身辺安穏、
到前堂聴為娘訓教一場。」	丟下我母子們孤苦另丁。	那有児在家中好不耽心。
小嬌児不知情一旁坐定、	幸喜児你生来聡明秀俊、	娘望児到蔡府前去拝懇、
為娘的有言来児聴分明。	朝于斯夕于斯苦読書文。	岳父母択吉期与児完姻。
我的児今年有十三歳整、	児今年十六歳不為太嫩、	成婚後望我児朝夕発憤、
正好到聖堂内攻読書文。	望我児到後来改換門庭。	你総要做一個人上之人。
我的児正年少攻読為本、	娘昨日得下了蔡府来信、	児要想你的父官居極品、
切不可貪玩要西走東奔。	叫我児都堂府前去招親。	体父志苦読書好奔前程。
倘若是到後来皇榜高進、	今日里命我児広東省奔、	在蔡府切不可東遊西混、
那時節我的児四海揚名。	命我児与牛青一路同行。	怕的是你岳母道娘不能。
	天未黒早宿店早些安寝、	他説你父早死失了教訓、
	鶏鳴時早看天早些登程。	官家子失了教沾辱先人。
	見岳父和岳母好言相問、	況我児你本是秀才身分、
	但愿児早完婚急転家庭。	豈学那無知識糊塗之人。
	夜已深為娘的話不多論、	談罷了我只把劉青叫応、
	等明日天明亮児好登程。	在路上侍公子諸事小心。

〔下本〕第四場〔審許〕	④許嬌春上堂
老大人坐大堂容我訴稟、 細聴我落難人訴表家門。 表家郷住山西平陽県境、 七里村有我家門。 老爹爹王全忠我名文進、 読過聖賢書入了黌門。 只因為到広東把親来認、 誰知道身染病一命帰陰。 多蒙了衆衙役情高義盛、 将尸首運之在官山来停。 三更天不知誰将衣剥尽、 也是我不該死開棺還魂。 莫奈何我只得白馬廟進、 向神聖借衣衫穿之在身。 這就是落難人真言告稟、 望大人開大恩放我逃生。	尊声青天容我稟、 聴我従頭訴分明。 家住平陽西洛郡、 父親名叫王協清。 母親楊氏多薄命、 単只生我独一人。 生員名叫王文進、 年已十六入黌門。 父親貿易在外境、 母命我来找父親。 来到広東身染病、 一気不来命帰陰。 多沐善人施惻隠、 施捨棺木埋山林。 皆因陽寿還未尽、 賊人盗墓又還魂。 黒夜一人往前奔、 白馬廟内暫安身。 有人掛袍還愿信、 生員借穿是真情。 這是実言無瞞隠、 還望青天把冤伸。 釈放生員回原郡、 一重恩報九重恩。

善書のテキスト３種のストーリーを比較すると次の表のように似通っているが、「宣」の場面が次第に多くなり、親子・友人・主僕・夫婦の意思が表現され、特に徐忠徳が今も語っているテキストではグループ上演をしていることから人物が歌詞の応酬をして意思の疎通を行っており、物語の中で聴衆への教訓が行われていることがわかる。

荊州善書『六明珠』	何文甫『義侠伝』	徐忠徳『劉子英打虎』 （対詞▼回詞）
明朝、鉄月爾皇帝の時、山東省沿海県の徐沢は吏部の職にあり、夫人李氏を娶り、一子嬌春は幼い時に広東省の蔡都堂の娘月娥と婚約していた。徐沢が奸臣に殺されると、李氏は家僕劉青、侍女春香とともに沿海に帰ったが、家も火災に遭ったため、嬌春に劉青を同伴して広東に行くよう命じ、書信をしたためる。〔宣①〕	①楊氏夫人与子嬌春餞行 明の嘉靖年間、北京順天府宛平県の許元標は吏部尚書に在職して妻楊氏との間に一子嬌春があり、幼時に広東省の都堂蔡雲龍・夫人王氏の娘蘭英と婚約していた。当時二人は同僚で媒酌人も無く、明珠・蟒袍を証として退職したが、許元標が亡くなり、嬌春は喪に服していた。蔡雲龍から嬌春の婿入りを促す書信があったため、家僕劉青を嬌春に随行させることにして、楊氏は嬌春を送別する。	①楊氏与子餞行・嬌春還詞 楊氏は夫が厳嵩に迫害されて帰郷した後まもなく死亡し、広東の蔡都堂から書信があり、蔡家の娘との結婚をまとめるため許嬌春に家僕牛青を同伴して出発するよう命じ、嬌春を送別する。 ▼嬌春は母の言いつけに従うと答える。

李氏は書信とともに六明珠・婚約証を嬌春に渡して出発させた。嬌春は七日歩いて臥龍崗に着いたが、殺虎嶺に虎が出ると聞いて劉青が出発しないため、劉青を鞭打つと、劉青は嬌春を殴って荷物を奪い、黒河に逃げ去る。嬌春は劉子英に救われて、泣いて事情を訴える。〔宣②〕	②許嬌春対劉子英 嬌春は楊氏の訓戒を聞いて出発したが、途中で劉青は旅館の主人が嬌春と差別したので不満を抱き、芒碭山まで来てわざと進まず、嬌春が鞭打つと逆に嬌春を打ち殺して木に吊し、明珠・蟒袍を盗んで一人で広東へ向かった。ここに山東平陽府西洛県出身の打虎将劉子英は父劉奇が奸臣に迫害されて自刎して死んで後、妹翠英を背負って芒碭山まで逃れて来たが、猛虎に遭って妹と生き別れになった。子英に救われて、嬌春は泣いて事情を語る。	②嬌春見子英・子英回詞 嬌春は劉子英に救われ、自分は順天府宛平県の許元彪の子で、家僕牛青が広東南海県の都堂の娘との婚約の証である明珠・蟒袍を奪い去ったと語る。 ▼劉子英は山西平陽府西洛県出身で元帥の父劉明奇、母趙氏と妹翠英がいたが、厳嵩に誣告されて一族が誅殺されたため妹を背負って逃亡し、猛虎に遭って生き別れ芒碭山で虎を打って生活していると告げる。
劉青は嬌春の名前を騙って広東省の蔡家に赴くが、侍女粉紅に見抜かれ、夫人は侍女東梅を代わりに嫁がせる。	③丫環春香対夫人小姐 劉青は広東に着いて蔡家に明珠・蟒袍を示したが、侍女春香は劉青が貴公子らしくないといい念のため侍女を身代わりに嫁がせるよう、夫人に忠言する。	③蔡鳳嬌自嘆 蔡鳳嬌は許家の子と称する男の容貌が醜悪で読書人に見えないのに父に人を見る目が無く母も父に盲従することを嘆き、侍女春香と相談しようと考える。
嬌春は傷が癒えて劉子英の付き添いで蔡家を訪れるが、蔡都堂が婿と認めないため、泣いて訴える。〔宣③〕	④嬌春見岳父蔡雲龍 侍女春香は子英の妹であり、蘭英とは姉妹のように仲が良かった。嬌春の傷が癒えると、子英は王炳の店で衣服を調達し、嬌春を送って広東へ来ると、蔡都堂は中で拷問を準備していた。嬌春は蔡雲龍に事情を話す。	④許嬌春見岳父 嬌春は蔡都堂に自分の素性を語って牛青の素性を確かめてほしいと嘆願する。
蔡都堂はそれでも認めず、嬌春を縛り上げたため、嬌春は子英に救いを求め、子英は嬌春を背負って逃げるが、旅館に着いた時すでに死んでおり、棺に入れて白骨塔に安置し、泣いて告別する。	子英は叫び声を聞いて嬌春を救出したが、劉四麻子の旅館まで来た時には嬌春は意識がなく、棺に入れて城外の官山に葬った。	⑤子英哭弟尸 子英は嬌春を蔡雲龍の家から救出する途中で死んだことを悲しむ。
王大胆という者が賭博帰りに墓を盗掘し、嬌春は蘇生する。		⑥嬌春還陽自嘆 嬌春は墓を盗掘されて蘇生するが途方に暮れる。
嬌春は関王廟に至り、関帝の袍で身を覆った。	⑤許嬌春借袍跪裏 嬌春は地皮虫に墓を荒らされて寒さに耐えられず、白馬廟に来て菩薩に祈って龍袍を借りる。	
鳳凰県の役人が参詣に来て、嬌春が龍袍をまとっているのを見て県に連行する。	棋盤山の五虎将が参詣して去った後、南海県の役人李昇・王貴が事件の解決を祈りに来て嬌春を発見して捕らえる。	

嬌春は泣いて弁明した。〔宣④〕 周知県は嬌春が恩人徐天官の子だと知って保護する。	⑥假名王文進見周勝清老爺 南海県の知県周勝清には夫人王氏と一子官保があった。嬌春は王文進という偽名を用いて事情を告げると、周知県は嬌春を釈放する。	⑦許嬌春上堂 嬌春は法廷で王文進と名のり、蘇生した後に白馬廟で廟神の袍を借りたと弁明する。
七日後、嬌春は外に出て道に迷い、蔡月娥に会って保護される。夫人は知って蔡都堂に知らせ、蔡都堂は嬌春を泥酔させて県に送り、処刑を求める。	嬌春は蔡家に迷い込んで蔡雲龍に捕らえられ、再び南海県に連行される。嬌春は周知県に実情を訴える。	⑧嬌春二次上堂 嬌春は法廷で実名を告げ、官に釈放された後に道に迷って蔡都堂の花園に入り盗賊として捕らえられたと弁明する。
周知県は自分の子を身代わりに処刑し、嬌春に読書させる。	⑦県官周勝清対夫人・王夫人還詞・接出官保勧母回詞 周知県は嬌春を収監した上で、嬌春が恩人の子であり報恩のために官保を身代わりにすることを夫人に相談する。	⑨周勝清対夫人・夫人還詞・官保還詞 県令周勝清は許尚書のおかげで厳嵩の迫害を免れたことを夫人に告げ、恩人の子を救うために我が子を犠牲にしようと主張する。 ▼夫人は我が子を犠牲にするに忍びず悲しむ。 ▼官保は母を慰めて報恩のため我が身を犠牲にすると告げる。
		⑩陳洪対子英・子英還詞 員外陳洪は悪人蔡元青が権力を笠に着て娘金定を奪いに来ると劉子英に語る。 ▼子英は員外を慰め娘に扮装して蔡家に乗り込むと告げる。
	⑧假小姐丫頭春香不愿走怒罵 劉青は罪状が露見することを恐れ、妻蘭香に逃走を唆すが、蘭香は罵って拒絶する。	⑪牛青対假小姐・謝蘭香還詞 牛青は蔡小姐（実は侍女謝蘭香）に事実を打ち明け、家財を持ち逃げしようとはかる。 ▼謝蘭香は牛青を罵って自首を促す。
劉青は嬌春の姿を見て怖くなって逃走を企て、東梅を殺し宝物六明珠を奪って逃走し、山東に帰るため占い師に依頼して蔡都堂の偽の書信を作る。〔宣⑤〕	⑨劉青対夫人説誑話 劉青は蘭香を斬り殺して北京へ戻り、蔡家の命令で夫人を迎えに来たと騙して夫人と侍女裴月英を連れ出す。	⑫牛青対夫人 牛青は嬌春の母を蔡家に迎えることになったと欺いて外に連れ出す。
	蔡雲龍は劉青が殺したのが侍女蘭香だと知る。 子英は芒碭山の虎がいなくなり下山する。	
夫人は騙されて劉青と一緒に広東に向かい、劉青は殺虎嶺で夫人を殺そうとする。	⑩劉青対夫人吐実言・接出裴月英求情 避水珠・西牛角・龍鬚汗衫の三宝を持ち出した夫人を殺害しようとし、劉青は夫人に真相を語る。	⑬裴月英求情 侍女裴月英は楊氏夫人を殺そうとする牛青を遮り、夫人を見逃せば自分が牛青に嫁ぐと説得する。

侍女春梅が大声をあげたので劉子英が現れ、劉青は河に身を投げて逃げる。	⑪劉子英対夫人 そこへ子英が出現して夫人を救い、劉青は宝物を持って黒水国へ出走する。夫人楊氏だと知って子英は過去の経緯を語る。	⑭夫人対好漢・子英還詞 夫人は牛青を撃退した劉子英に謝意を表する。▼子英は牛青が河に落ちて死んだことを告げ、夫人を保護する。
子英は夫人を小屋に泊める。子英は宿を求めて羅白雲と戦闘し、夫人を迎えて嬌春が死んだと告げると、夫人は泣いて悲しむ。羅夫人は慰める。〔宣⑥〕 羅白雲は蔡月娥が李尚書の子と婚礼を挙げる恐れがあるため子英とともに広東へ挙兵する。	子英は夫人を羅家寨へ送る。羅家寨の羅定山はもと義勇侯で、劉・許二公の結末を見て深山に隠居していた。 子英は羅定山の兵を借りて広東へ出陣したが、合図を間違えて敗戦する。	
子英は途中で眠り、金が無いので広東人の雇父子を車で推して行き、張員外の子張龍・張虎と王員外の娘翠蘭に会い、翠蘭が蔡中元に奪われたと聞く。	⑭陳洪員外対子英 子英は嬌春を捜す途中で王定の店でただ食いして員外陳洪に出会う。陳洪は娘金定が蔡知府の子元青に強奪されると嬌春に訴える。	
子英は翠蘭を奪回して王員外父子を逃がし、王員外の名で書信をしたため、蔡中元をおびき出して、翠蘭に扮装して蔡中元を殺す。子英は蔡中元の妻陳荷花と戦って勝負がつかず逃走し、羅白雲と落ち合って李尚書の媒酌人王丞相を打ち殺す。 子英は城門が開かないため逃げられず、強盗の馬で逃走する。	⑮無題 子英は娘に扮装して蔡家に乗り込み、一家を殺害して丹徒県に自首して訴える。邱知県は子英を収監する。	
蔡月娥は牢から出られず泣いて父を怨む。〔宣⑦〕		
子英は道に迷って太行山に入る。太行山の山賊馬勝雲は夢に桃花聖母から赤い顔の大男と姻縁があると告げられ、子英を捆仙索で縛って捕らえる。子英は馬騰雲に勝てず、結婚を承諾する。		
嬌春は周知県の養子となり、科挙を受験するため上京する。	⑯周勝清老爺送行対嬌春・許嬌春還詞 周知県は嬌春に科挙を受けるため上京するよう促す。 ▼嬌春も信頼に応えると語る。	⑮周勝清与嬌春餞行・嬌春還詞 周勝清は嬌春に上京して科挙を受験するよう促す。 ▼嬌春も科挙に及第して帰還することを誓う。

嬌春は太行山で山賊に捕まり、自分の不運を嘆く。〔宣⑧〕	⑰劉子英見許嬌春弟兄会・許嬌春還詞 嬌春は上京する途中で棋盤山の五虎将に捕らえられ土牢に収監される。子英は邱知県に放免されて嬌春を捜す中、棋盤山に来て五虎将と義兄弟の契りを結んで嬌春と再会し、泣いて喜ぶ。 ▼嬌春も喜びの言葉を返す。	⑯弟兄山中会・子英還詞 嬌春は山賊に捕まって劉子英と再会し、これまでの経緯を告げる。 ▼劉子英は荷担ぎに騙されて陳員外に飯代を払ってもらい、蔡元青を殺して芒?山に隠れた後、嬌春の母を救って羅家寨に送ったこと、嬌春の蘇生を知って棋盤山で待っていたことを告げる。
子英は嬌春が繋がれているのを見て救い、旅費を贈って上京させる。嬌春は科挙を受験して状元に及第する。 劉青は黒水河から蒙古国に逃れて駙馬となり、蔡月娥の肖像を献上したため、蒙古王は月娥を要求して中国に宣戦する。 嬌春は上奏して太行山の子英を推挙する。子英は反対する馬勝雲に内緒で下山し、武状元に及第して元帥となり、羅白雲を先鋒として蒙古国と戦うが、牛頭公主の毒矢に当たったため、馬騰雲が恩赦によって元帥として出陣し、牛頭公主を破る。劉青は罪を恐れて子英と交戦するが敗れ、中国に連行され、嬌春によって処刑される。（末尾「従此案看来、以好者為法、悪者為戒。」）	嬌春は吐血した子英と別れて上京し、状元に及第する。雲南の金山嶺の女山賊馬騰雲は黎山老母の命を受けて子英との姻縁を完結するため下山して王城を包囲する。厳嵩は嬌春を陥れるため出陣させる。嬌春は子英を推薦して馬騰雲と戦い、周勝清が子英に馬騰雲との姻縁を告げて媒酌をする。	⑰母子会・嬌春還詞 夫人は嬌春と再会して喜び、劉子英に救われたことを告げる。 ▼嬌春は棋盤山で子英に再会した後に上京して科挙に状元で及第し、厳嵩の推挙で元帥として金山嶺の女山賊を平定し、牛青は宝物を献上して進宝状元を授かるが、子英によって殺されたと語る。
	⑱蔡蘭英対状元公与父求情 蔡蘭英は嬌春に父の免罪を嘆願する。	⑱兄妹会・合詞 翠英は子英と再会し、翠英は蔡家の侍女となったこと、子英は高官を授けられたことを語り合う。

四　結び

以上、現代の善書創作について、十一作品を例にとってその様態を考察してみた。それをまとめてみると、以下のようになろう。

『冤中冤』（袁大昌）は、宣講集『福海無辺』（民国二年石印本）巻四所収の案証「冤中冤」に取材したものであるが、案証「冤中冤」は『聊斎志異』巻十「臙脂」に取材しており、すでに小

説的な趣向が取り入れられていた。そして現代の善書では寡婦に再婚を許さない儒教的な発想が消滅していた。

『売花姑娘』（杜子甫）は、その説話は明の説唱詞話『曹国舅公案伝』に由来して、現代では花鼓戯・黄梅戯で上演されており、善書が戯曲に取材した例である。

『双合印』（鍾立炎）は、説唱『双合印』に取材していた。説唱本では明代の「説唱詞話」以来、人物の訓戒の言葉を表現する場合に、十言句が用いられており、説唱『双合印』にもその特徴が表れていて、善書『双合印』はそれを取り入れており、善書が説唱本に取材した例として重要な文献である。本論では具体的にストーリーと人物の言葉を比較してその類似性を指摘した。

『五子争父』（袁大昌）は、老人を奉養することを説いた民話に起源する説話であり、農村の説書文芸である河南墜子『五子争父』や、河南の戯曲である曲劇『三子争父』などで上演されていた。地方の説書・戯曲の創作は民話に取材して行われ、善書はそうした地方演芸を取り入れたものと考えられる。伝統的な儒教道徳を重視する地方文芸の共通性を見ることができよう。

『孝子得妻』（袁大昌）は善書らしい題名がつけられているが、実は清・翁山の小説『前明正徳白牡丹伝』に取材した作品であった。袁大昌氏は小説・戯曲に取材した作品を多数作り続けている。(17)『孝子得妻』もその中の一作である。

『三宝記』（袁大昌）は、湖北省の花鼓戯『平頂山』を改編した作品であった。

『状元尋母』（袁大昌）も湖北省の提琴戯『大合銀牌』を改編した作品であり、人物を「宣」によって描写する善書では主人公が飢饉によって身売りする場面から語り始めていた。

『恩讐記』（袁大昌）は揚劇あるいは潮劇を改編した作品であった。

『尋児記』（徐忠徳）は京劇『三進士』に取材した作品であり、「宣」の場面を多く設定していた。

『劉子英打虎』（徐忠徳）は善書『義侠伝』（何文甫）を継承した作品であり、善書は黄梅採茶戯『劉子英打虎』に取材していた。善書『劉子英打虎』は先行する善書『義侠伝』よりも「宣」の場面を多くして演劇的効果を高めていた。荊州には別に善書『六明珠』が講じられていた。

現代の善書は娯楽性を高めるため、小説・戯曲に取材した作品を創作するようになり、その中で「宣」の場面を設定して家族倫理、社会道徳を説くという新しいスタイルを形成するようになったのである。(18)

（注）

（1）『躋春台』四巻（一八九九）をはじめとして、『宣講回天』四巻（光緒三十三年〔一九〇七〕）、『宣講摘要』四巻（同年）、『宣講福報』四巻（同年）、『宣講彙編』四巻（同年）、『宣講金針』四巻（同年）などが現在のこっている。

（2）『曲海総目提要』巻三十二に収録する。

（3）李家瑞・劉復『中国俗曲総目稿』（一九三二、国立中央研究院）収録。

（4）柯正貴口述本、『安徽省伝統劇目匯編』（一九五八、安徽省文化局劇目研究室）所収。

（5）程積善等口述本、『安徽省伝統劇目匯編』（一九五八、安徽省文化局劇目研究室）所収。

（6）善書『打碗記』については、林宇萍「袁大昌による漢川善書『打碗記』の創作」（二〇〇五、東アジア研究４）、「汉川善书《打碗记》的创作—善书的应用文形体分析—」（二〇〇六、アジアの歴史と文化10）参照。

（7）一九八七年、宜興市万石郷文化站採録。『中国民間故事集成』江蘇巻（一九九八）収録。

（8）一九八七年、徳清県新聯郷採録。『中国民間故事集成』浙江巻（一九九七）収録。

（9）一九八〇年、安康市忠義郷水田村採録。『中国民間故事集成』陝西巻（一九九六）収録。

(10)『人民日報』二〇〇二年七月十五日版。

(11)「以戏送法 寓教于乐　级索镇让群众在潜移默化中受教育」2001年02月12日

(12) 劉玉清述録。『湖北地方戯曲叢刊』第四十八集（一九八二、湖北省戯劇工作室編印）収録。

(13) 上本「趕春桃」・下本「借耕牛」、許国南述録。『湖北地方戯曲叢刊』82（一九八〇、湖北省芸術研究所）収録。

(14)『潮劇劇目彙考』（一九九九、広東人民出版社）参照。

(15) 曽白融主編『京劇劇目辞典』（一九八九、中国戯劇出版社）参照。

(16) 柯火英述録。『湖北地方戯曲叢刊』巻76「黄梅採茶戯」（一九八〇、湖北省戯劇工作室編印）収録。

(17) 袁大昌氏は『血手印』『狸猫換太子』『粉粧楼』『楊家将』『董小宛』『天宝図』『地宝図』『買臙脂』『梁祝姻縁』『秦雪梅弔孝』『車棚産子』『唐李旦』『再生縁』『劉公案』『武松殺嫂』など多くの善書作品を小説・戯曲をもとに創作している。

(18) 関連論文として林宇萍「漢川善書における伝統宣講の継承と変容」（二〇〇六、九州中国学会報44）を参照されたい。